



第1章 地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

奥村, 弘 ; 長坂, 一郎 ; 井上, 舞 ; 大国, 正美 ; 徳原, 由紀子 ; 大槻, 守 ; 木村, 修二

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 20 (2021 (令和3) 年度事業報告書) :1-43

(Issue Date)

2022-03-28

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013437>



第 1 章

地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

第 20 回 歴史文化をめぐる地域連携協議会 地域歴史遺産をめぐる「つながり」 —大学・住民・自治体連携の 20 年—

2022 年 1 月 19 日（土）、第 20 回歴史文化をめぐる地域連携協議会を開催した。本年度のテーマは「地域歴史遺産をめぐる「つながり」—大学・住民・自治体連携の 20 年—」であった。当初、本協議会は対面での開催を予定していたが、直前の新型コロナの急激な感染拡大を受け、オンライン開催に切り替えた。昨年度の協議会では報告者の方のみ会場に来ていただき、報告を配信する形であったが、今回は報告者についてもそれぞれの職場や自宅から参加していただいた。また、今年度も午後のみ開催とした。当日の参加者は 23 機関 40 名であった。ただし、昨年度と同様に、ひとつのパソコンを囲んで皆で視聴された地域団体の方もあったようで、実際の参加者はもう少し多かったとみられる。

今回の協議会では、テーマに即して、長年地域連携事業にご協力頂いている地域（民間団体）、自治体、大学関係者に登壇いただき、地域連携事業の成果と課題について報告いただいた。その後、全体討論が行われた。当日の報告・討論の内容は、以下に掲載する。また、当日の配付資料については、神戸大学学術成果リポジトリ (http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003kernel) に掲載予定である。

（文責・井上舞）

開催趣旨

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターが設立され、今年度で 20 年となります。この間、地域連携センターでは兵庫県内を中心に、多くの自治体や郷土史団体などと連携し、地域歴史遺産の保全・活用に関する取り組みを展開してきました。そして、様々な事例や活動を通して見えてきた課題を、地域連携協議会において共有してきました。第 1 回の協議会では、地域住民・自治体・大学の各関係者が同じ席に着き、「地域歴史遺産の新しい活用のあり方を考える」というテーマで議論を行っています。このテーマは今日まで続く、三者協働の出発点となりました。これまで協議会で設定されたテーマは多岐にわたりますが、通底している課題は「地域歴史遺産をどう活用していくか」「地域住民・自治体・大学の三者がどのように協働していけばよいか」であるように思われます。

センターの設立と同時に始まった地域連携協議会も、今回で 20 回となります。地域連携事業がこれからも続いていくことを考えれば、この数字はひとつの通過点にすぎないかもしれません。とはいえ、節目の年に、地域連携事業で取り組んできたこと、その共有の場としての協議会の役割と成果、さらに今後の課題を考えていくことは、この先の歴史文化継承のあり方を考えていく上で必要なことと考えます。

そこで今年度は「地域住民・自治体・大学の三者がどのように協働していけばよいか」という課題に即しつつ、「地域歴史遺産をめぐる「つながり」

「大学・住民・自治体連携の20年」をテーマとし、これまで長く連携事業に携わってこられた方をお招きし、それぞれの立場から、連携事業の成果と課題についてご報告いただきます。

ここ数年、コロナ禍にあって私たちを取り巻く「つながり」のあり方は、大きな変化を求められました。オンラインを利用した講演会や講座などで、新たな「つながり」が生まれる一方で、従来からあった人と人との「つながり」は希薄化してきているように思われます。

私たちが提唱する「地域歴史遺産」は、地域に残された様々な「モノ」と人々の関係性の中で生まれ、活用され、継承されていくと考えられています。だとすれば、コロナ禍によって顕在化した人と人との「つながり」の希薄化は、地域歴史遺産滅失の危機につながりかねません。

20年の節目の年に、現在直面している状況と、これまでの地域連携協議会の果たした役割を踏まえながら、これからどのように「つながり」を維持し、地域歴史遺産の保全・活用・継承につなげていけばよいかについて、皆様と議論していきたいと思っております。多くのご参加をお待ちしております。

プログラム

日時：2022年1月29日（土）13:00～17:00

主催：神戸大学大学院人文学研究科、同地域連携センター

共催：兵庫県教育委員会、科学研究費特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」研究グループ（研究代表者・奥村弘）、大学共同利用機関法人人間文化研究機構「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」

13:00～13:05 事務連絡

13:05～13:10 開会挨拶 奥村弘（神戸大学理事・副学長）

13:10～13:15 主催者挨拶 長坂一郎（神戸大学大学院人文学研究科長）

13:15～13:30 趣旨説明 井上舞（神戸大学大学院人文学研究科）

13:30～14:10 報告①「歴史文化をめぐる地域連携協議会の成果と課題」大國正美（神戸深江生活文化史料館）

14:10～14:20 休憩

14:20～14:50 報告②「丹波市での地域連携～これまでと今後の課題」徳原由紀子（丹波市教育委員会）

14:50～15:20 報告③『『村の記憶』を書き継ぐために』大槻守（香寺町史研究室）

15:20～16:00 報告④「地域連携センターの20年」木村修二（神戸大学大学院人文学研究科）

16:00～16:10 休憩

16:10～16:55 全体討論 司会：市沢哲（神戸大学大学院人文学研究科）

16:55～17:00 閉会挨拶 市沢哲

第20回 歴史文化をめぐる地域連携協議会
地域歴史遺産をめぐる「つながり」
—大学・住民・自治体連携の20年—

オンライン開催 日時 2022年1月29日（土）13:00～17:00
要事前申込 定員 100名

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターが設立して今年で20年になります。この間、地域連携センターでは県内外を中心に、多くの団体や個人と連携し、地域歴史遺産の保全・活用に関する取り組みを進めてきました。今年も地域歴史遺産、さらには地域連携事業を通じてこれらを進め続け、それぞれの立場や連携の成果と課題についてご報告いたします。報告は以下のとおりです。これまで地域連携協議会の開催した地域歴史遺産保全の「つながり」を継承し、地域歴史遺産の保全・活用・継承につなげていけるようについて、皆様と議論していきたいと思っております。

登壇者
 大國 正美（神戸深江生活文化史料館）
 徳原 由紀子（丹波市教育委員会）
 大槻 守（香寺町史研究室）
 木村 修二（神戸大学大学院人文学研究科）

申込方法 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターHPに設置した申込フォームをご利用ください
 申込締切 1月26日（水）
<http://www.kobe-u.ac.jp/~area-c/>
 協議会当日、神戸大学へのご来場はお断りしております

協賛者
 神戸大学大学院人文学研究科、地域連携センター
 兵庫県教育委員会
 科学研究費特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」研究グループ
 大学共同利用機関法人人間文化研究機構「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」

開会挨拶

奥村 弘
神戸大学理事・副学長

皆様、お休みで、しかもコロナのはやっている中で参加していただきまして本当にありがとうございます

ざいます。神戸大学の理事・副学長になりました奥村でございます。今年度から、全体の地域連携の担当なども含めた理事を仰せつかっておりまして。また皆様、よろしく願いいたします。

今回の協議会ですけれども20回ということになりました。20年前を思い返して見ますと、後で木村さんからお話があるかと思えますけれども、文学部の車庫を改修しまして地域連携センターができました。車庫でしたので入り口はそれなりの広さがあるのですが、奥に入っていくと男の人であれば立てないぐらいの狭い高さになっちゃうというところでしたけども。何とかそこからスタートして今日まで進めてきました。

今回のテーマにありますように、一番基本としては、地域歴史遺産をどう活用していくのか。地域住民、自治体、大学の三者がどのように協働していくのかというのがセンターの中の重要なテーマとしてあったように思います。

今日、そういう形で非常に長い間私たちの活動と関わる方に様々な御報告をしていただくのですが、私からは大学全体の中での位置づけを少しだけ述べたいと思います。

人文学研究地域連携センターの設置ですけれども、これは阪神・淡路大震災以降の神戸大学の地域連携事業の中で生まれてきたものです。ほぼ同時期に、センターとしては人文学研究科の地域連携センター、それから農学の地域連携センター、そして保健学研究科の地域連携センターという、3つの地域とかなり深い関係のあるセンターが設置されまして、どのセンターも今日まで様々な活動をしています。

そういう意味では、大学全体の地域連携の事業の中で地域連携センターは重要な役割を、20年間果たしてきたということになります。

また、全国の歴史文化系の大学の地域連携事業のモデルとしての役割も担ってきております。同時に、センター設立の前提としての阪神・淡路大震災のときの歴史資料の保全活動などの経験というのは、突然始まったわけではなくて、戦後の歴史学や大学の歴史文化に関わる研究者の活動の中

で、それを前提として、それを深める形で進んできたものですので、そういう点で重要な役割を、全国的な歴史文化の活動の中でも果たしているのではないかと考えております。

現在、地域連携センターは、東北大学とそれから人間文化研究機構。これは国立の歴史民俗資料館、千葉にありますけれども、そこなどを中心として歴史文化の資料保全のための大学と共同利用機関のネットワーク事業というところの中核的な役割も果たしております。

全国的に歴史文化の問題というものを、地域の中でどのように捉えていって、どのような活動をしていったらいいのかということ積み上げていく。特に、災害時の活動をしっかりとしていくというのがこの事業の中心でありますけれども。そういう点で大きな役割を果たしているところでございます。

実際、この間、このネットワーク事業や様々な努力の中で災害時の活動を大学の歴史文化に拠点を置いた形で展開する資料ネットと呼ばれるグループがたくさんありますけれども、全国で30団体ぐらいになってきております。

大学の中での地域との継続的な歴史文化に関する役割を担うセンターのような活動はあるのかということですが、現実にはそれほど多くありません。幾つかの大学でいろいろな試みが始まっておりますけれども、大学のセンターがあるような活動というのは今後の活動の中でとても重要な位置を占めているというふうに思います。

人文学研究科も含め、神戸大学の地域連携センター全体のことでありますが、なかなか全体的にしっかりとしている事業やその役割というものが、個々の先生方の評価に十分つながっていないということがございまして。それを生かして、やっぱり職業としてずっと大学の中で展開していけるにはどうしたらいいかということが大きな課題で。人文学の地域連携センターも、そのセンターの専任の教員という形ですべて雇われている方はいないという状態の中でこの20年間を過ごしておりますので、その点をどのように展開するかが大

きな課題です。

そういう点で、日本全体でも言えることだと思いますけれども、そういうことをしっかりしていくということが、歴史文化に関わる大学の中での研究において、とても重要な意味があるところを、再度大学としてはしっかりと位置づけていく必要があると考えています。

大学にとりまして、歴史文化を担える次世代の研究者をどのように生み出していくのかということ。これが、今、我々にも問われています。そういう研究科がしっかりと生み出されないと、これは当然ながら地域文化においてもとても大きな損失になっていく。対応できないということになっていくわけでございます。

全体に人文科学系の研究者が大学の中で少しずつ減っていった中で、こういう活動をどうやって根づかせていくのかということが問われているだろうと思います。

歴史文化の研究に関わってみると、やはり地域との関わりあいの中でテーマを立てたり、いろいろな人たちと研究組織を作ったり、様々な形で成果を出していくということは、これはもう研究のアウトリーチではなくて研究そのものの根幹に関わる問題ではないかと思っております。

歴史学や歴史文化に関わるような、様々な分野の研究を志す若い人たちが、この後も継承されていくということは、私たちが歴史文化の問題を捉えるときの一つ重要な視点だというふうに考えております。今日の報告の中では、このことについては中心的なテーマではありませんけれども、私の立場の中で言うところがか非常に大事なことになっていると考えております。また、この点でも様々な形で御意見がいただければありがたいと思っております。

今日は、半日長丁場ですけれども、新たな知見がここに加わって次へと進んでいけばいいなど思っていますので、よろしく願いいたします。

以上でございます。

主催者挨拶

長坂 一郎
神戸大学大学院人文学研究科長
人文学研究科地域連携センター長

皆さん、こんにちは。本日は、第20回地域連携協議会に御参加くださり、誠にありがとうございます。神戸大学人文学研究科研究科長の長坂と申します。主催者より一言、御挨拶申し上げます。

本日はオンラインにて参加を予定していましたが、現在流行しています新型コロナウイルスの感染者が家族にいるということもありまして、急遽録画にての挨拶となりました。御了解いただければと思います。

人文学研究科地域連携センターが設立されて今年で20年となります。私がちょうどこの神戸大学文学部に着任した頃ということになり、懐かしく思い出されます。

この間、地域連携センターでは、兵庫県内を中心に自治体や郷土史団体の方と連携して地域歴史遺産の保全・活用に取り組んでまいりました。また、こうした事例の報告や活動を通して見えてきた課題を共有するために、地域住民、自治体、大学関係者が一堂に会する今回のような地域連携協議会が開催されることとなりました。

センター設立の年に第1回が行われ、以降、毎年様々なテーマを参加者の皆様と議論し、今回記念すべき20回目を迎えることとなりました。

本協議会は、一つのテーマについて様々な立場の方が意見を出し合い議論するということのほかに、関係者間の交流の促進という目的もあります。

これまでの協議会では、単に報告を聞き議論するというだけでなく、休憩時間や懇親会を通じて新しい出会いや情報の交換が行われてまいりました。しかし、コロナ禍のため、前回の協議会はオンラインでの開催を余儀なくされ、今年度は当初は対面での開催を予定していましたが、年明けからの感染者急増を受けオンラインの開催となりました。

今回の協議会では、今のコロナ禍という現状と、つながりを生み出す場としてのこれまでの地域連携協議会の役割を踏まえつつ、「地域歴史遺産をめぐる「つながり」—大学・住民・自治体連携の20年—」がテーマとなっています。

地域歴史遺産に限らず、ここ数年コロナ禍にあって私たちを取り巻くつながりのあり方は大きな変化を求められています。もちろん、今回の協議会の例もあるとおり、オンラインという新たな手法によって遠方の方とも気軽につながれるようになったという利点もあります。しかし、やはり以前からあった人と人とのつながりは今、現在希薄化しているような気がしてなりません。

私も自宅待機となってから日頃の仕事や授業などを全てオンラインでこなすという、そういった状況になっているわけですが、やはり、周囲から孤立しているんじゃないかというような気がしてなりません。

昨年度に引き続きオンラインでの開催となりましたが、本日、県外から多くの方が参加していただいていますように、こうした新たな取り組みとこれまでの取り組みをうまく組み合わせ、新しいつながりが生まれることもあるのではないかと思います。

それでは、本協議会が実り多いものとなりますよう祈念しまして御挨拶とさせていただきます。

最後になりますが、皆さんもどうぞ御自愛ください。ありがとうございました。

趣旨説明

井上 舞
神戸大学大学院人文学研究科

それでは、引き続き、協議会に移ってまいりたいと思います。

報告に移る前に、私より今回の協議会の趣旨について説明させていただきたいと思います。

趣旨文につきましては、既に皆様に御案内しているところですが、先ほど、長坂研究科長の挨拶

にもございましたように、今年度で地域連携センター設立20年、協議会に関しても今回で第20回となりました。この間、協議会では、毎年1つテーマを決めてそれについて協議するという形で開催をしてきています。どのようなテーマがあったかという点については、この後、大国さんの御報告の中で詳しく触れられておられるので私からは省略させていただきます。

これまでのテーマを見返してみると、やはり地域歴史遺産をどう活用していくか。あるいは、地域住民、自治体、大学というのがどのように連携していけばよいのかという、この2つが大きな論点になっていたように思われます。

そこで今回の協議会は、地域住民、自治体、大学がどのように連携していけばよいかという課題。こちらを軸にこれまでの20年間を振り返りつつ、次の20年につながるような議論をしていきたいと考えております。また、今回の協議会、昨年に引き続き、オンラインの開催となりました。当初は対面でやるつもりで準備をしていたのですが、年明けの感染者急増を受けまして急遽オンラインとなっています。

これまでの協議会であれば、いろいろな方が神戸大学に集まっていたいて、休憩時間にはあちこちで話に花を咲かせる光景が見られました。ですが、ここ2年ほどはそれができなくなっています。もちろん、今、こういうふうにはオンラインでやっている、これも協議会なのですが、どうしてもオンラインになると、以前のような休憩時間の楽しいお話の時間がなくなってしまう。それを考えたときに、協議会の役割というのは一体何なのかということ、コロナ禍の中で改めて考えさせられました。

ですので、今回の協議会では、三者の連携をどうすればよいかという課題も踏まえつつ、併せて協議会の役割や課題についても少し考えてみたいと思っております。

その辺りを踏まえまして、今回4名の報告者の方に報告をお願いいたしました。

最初の報告者の大国さんですが、第1回から

ずっと協議会に御参加いただいております、かつ何度か御報告もいただいております。その立場から、歴史文化をめぐる地域連携協議会の成果と課題ということでお話しいただきます。

次に、自治体と地域住民の方、それから大学を代表いたしまして、丹波市教育委員会の徳原さんより「丹波市での地域連携～これまでと今後の課題」、次いで、香寺町史研究室の大槻さんから「『村の記憶』を書き継ぐために」、最後に、本学の木村修二より「地域連携センターの20年」ということで報告をいただきます。

さて、今回、地域連携協議会で協議会自体の役割を考えるという課題がありましたので、12月にこれまで協議会でご報告いただいた皆様を対象にアンケートを実施しております。これを少し共有させていただきます。

ポータルに掲載されている私の資料では、お配りしたアンケートとその結果をまとめたものを掲載しております。端折りながら話をするので、詳しい報告については配付資料を御覧ください。

アンケート依頼ですが、協議会で報告・コメントされた民間団体がのべ37団体あったのですが、同じ団体が複数回報告されていたり、連絡先が分からなかったり、宛先不明で返ってきたものもございました。実際、依頼ができたのは31団体。そのうち16団体から回答がありました。本日も御回答いただいた方、御参加いただいております。ありがとうございます。

回答いただいた団体の方なのですが、大体月1回から2回ほど活動されている団体が多いです。それから、現在の活動ですけれども、こちらはいつから活動をしているかというところが、グラフ上からは分からないのですが、開始当初よりも順調に活動を続けられているという回答を、多くいただいております。

また、「この協議会に参加、御報告いただいた上で何か得たものがありましたか」という質問をさせていただいたのですが、一番多かったのが、ほかの団体の活動に刺激を受けたという回答でした。ほかに、ここに参加したことで人脈が

広がったというような回答もありました。

「この地域連携協議会にどのようなことを期待されていますか」ということについては、神戸大学の連携事業について知りたいという御意見があったほか、協力してくれる人を紹介してほしいとか、いろいろな事例紹介であるとか、悩みを解決する手助けをしてほしいというような回答が多数を占めておりました。

併せまして、こちらの団体の皆様に現在の活動についての悩み不安はありますかということで質問をしたところ、やはりメンバーの高齢化というところが一番多かったです。どうしても年月がたつにつれて皆さん、お年を召されていくのだけでも、新しい人がなかなか入ってこないということがあるようです。それと合わせまして、この先どういうふうに会の方向性を決めていけばよいのかということについても不安をお持ちの方がかなりいらっしゃるようです。

ざっくりとした報告ではありますが、あとは、議論の中でも少し深めていければと思います。今回のアンケートを通して、民間団体、地域の方に関しては地域連携協議会について各地域団体の交流の場であるとか人脈づくり、他の団体の活動事例の情報収集ということを協議会に求められているのだということが見えてまいりました。

では、例えば大学でありますとか自治体の方はどうなのかというと、それはまた違った回答も出てくるでしょうし、それは今後の課題にしたいと思います。今回、特に協議会に来てくださった地域の方に関しては、こういう意見が多数出たということを御報告させていただきます。

それと、これはアンケートの内容とははずれてしまいますが、オンラインが主流になる時代をどう考えていくかということです。オンラインであれば遠方からも参加できる一方で、やはり休み時間に交流する時間というのはなくなってしまいます。オンラインでやるにしてもいろいろこの先、考えていかなければいけない課題が多いのではないかと考えています。

それと、アンケートの返送方法なのですが

も。今回、ウェブでも回答可能にしたほか、eメール、ファクス、郵送、どれでも好きな方法で返してくださいとお願いしました。あえて、返信用封筒をつけなかったのですけれども、結果としましてウェブで回答していただいた方は3件のみで、あとはeメール2件、ファクス2件、ほかの方は郵送で返送いただいたので、切手代を出さずじまると反省しています。

我々大学はかなりオンライン化が進んでおりますので、当たり前のようにオンラインで何かをやるというような風潮になってはいますが、オンラインばかりに頼っていくというのはいかがかなというのも、この返送結果をみて思った次第です。

先ほどのアンケートの結果でありますとか、この後の皆様の御報告も踏まえながら後半、今回あまり時間がないのですが、討論の時間を設けております。オンラインということで少し発言しにくいと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、そんなに難しく考えずに普通に話しかけていただいたら大丈夫ですので、皆さん、討論のほうでもいろいろな御意見をいただければと思います。

私からの趣旨説明は以上になります。

報告①

歴史文化をめぐる地域連携協議会の成果と課題

大国 正美
神戸深江生活文化資料館・神戸新聞社

それでは、始めさせていただきます。

40分間の時間をいただいておりますので、この間に今回のテーマに沿って私なりの御報告をさせていただきます。

今回、私、神戸深江生活文化資料館という肩書と、それと神戸新聞社という所属、2つの立場で発言をさせていただこうかなと思いました。というのは、神戸新聞社に現在所属といいますか、8時過ぎに会社に入って記者活動をしながらかみみの日にボランティアという形で神戸深江生活文化資

料館。これは神戸の東灘区にある財産区がつくった民間の資料館でありまして、ここで長らく調査活動を続けています。

奥村先生なんかとも、もう三十数年間の調査を通じてのお付き合いがあります。震災のときは被災資料の救出活動に関わり、資料ネットの運営に現在も続けているというようなことで、これまで地域連携協議会につきましてはこの深江生活文化資料館という立場に関わってまいりました。

ただ、神戸新聞社が2014年7月に神戸大学と地域連携の協定を結びました。ちょうど、このとき私は企画総務局長ということでこの問題の所管をして、その後も会社のこういう立場ということでこの協議会のありように関わり、またどうあるべきかということについても考える機会を得たということで。この2つの立場に立って、ただ、主には地域歴史遺産の問題について話をしたいと思います。よろしくをお願いします。

趣旨説明にありましたように、この地域連携協議会の果たした役割は何なのかと。それから、どのようにつながりを維持するのかと。それが歴史遺産の保全・活用にどうつなげていくのかというこの3つの課題ですね。これについて先ほど申し上げた私の関わり方の立場で私なりの考えをお話ししたい。それは、一つは、歴史協議会の参加者の一人。それから、一方で、今申し上げたように大学と新聞社の連携の当事者の一人としてという立場になります。

具体的なお話の進め方につきましては、これまで19回の協議会があったわけですが、その中でどのような議論、どのようなテーマが取り上げられ、どのようにそれが議論されてきたのかということ私なりに整理をすると。それを基に、どのような成果があげられてきたのか。そして、残された課題としてどのようなものがあるのかということについて御報告したいと思います。

これまでの議論の詳細な中身につきましては、神戸大学のホームページの学術リポジトリの中に18回目までが既にアップされております。19回目も近々アップされると聞いておりますの

で、詳しくはそちらを読んでいただければいいと思いますので。回を追って簡単に御説明をさせていただきますけれども、気になった分については神戸大学のホームページで振り返っていただけたらなと思っております。

ということで、最初ですけれども、先ほどのお話にありましたように、この協議会というのは2003年2月に始まっています。その直前に地域連携センターができていましたので、できた地域連携センターの中の一つの事業というふうに始まったと私は認識しております。

もちろん、年に1回の会合ということですが、それはそのとき、そのときにテーマ、今から申し上げますけれども、当時の関係者の方、センター員の人たちが極めて何度もテーマについて論議をし、そしてそれを誰に話をしてもらおうのいいのかという論議を十分に重ねています。

そういう意味で言いますと、その時々抱えている大きな課題に対して、そのときの取り組みの知性であるとか考え方というのが、ある程度集約されているのではないかと感じています。

そういう意味で、これは年に1回の協議会の報告内容なのですが、単にそのときの会議議事録というものではなくて、それをさかのぼる1年間のこのセンターの取り組みであり、そのときに抱えている様々な課題といったものに向き合った結果だと思っています。

まず、1回目は、「地域歴史遺産の新しい活用のあり方を考える」というテーマを掲げました。

この1回目から「地域歴史遺産」というキーワードを掲げて、そしてこれをずっと通して議論を重ねているということは非常に大事なことだと思っています。大事なキーワードのところについては色を赤にしておりますので、またチェックしていただけたらと思います。

そこで議論されたことといたしますのは、経験の共有とか連携のあり方を考える。それから、市民とNGO、自治体、大学、そういった立場の違う人たちが意見をフラットな立場で交換する。それから、財政難の中で行政もなかなか厳しい状態に

あります。そういう中で行政の進め方というのはどうしたらいいのかということで、1回目は結構自治体の関係者がたくさん話をされています。

さらに、それを普遍して歴史文化を生かしたまちづくりはどうしたらできるのかということ。そして、そのために先ほども申し上げた様々な関係者がどのように連携したらいいのかということを議論いたしました。

2回目は、自然災害を取り上げました。これは、2003年に東北とか北海道で大きな地震がありました。そういったことを踏まえて資料ネットが阪神淡路大震災を踏まえて活動を始めたということもあって、改めて自然災害から歴史遺産をどう守っていくのかということがテーマになったというふうに思っております。

このときは、東北からも来ていただいてお話をいただいています。日常的にどのように保存と活用をするのか。震災で資料が散逸する、滅失するという問題もありますけれども、それ以前に、日常的にいろいろなことをやっておかないとそういう危機的なときには対処ができないというような共通認識もあったと思います。

3回目は、当時進められていました市町村合併の問題です。県内は村はありませんが、市町村合併によって資料の散逸が非常に心配をされました。あるいは、合併によって文化財を担当する職員が少なくされるのではないかとという心配。それから、一つの自治体が非常に広域になることによって、その中にそれぞれの地域の特性、個性というものが埋没するのではないかとというような心配などがありました。

それから、それぞれの小さな自治体が合併をして分庁舎になるようなことで、そこで保存されてきた公文書というのが散逸するのではないかとという疑問もありました。

それから、当然、過疎化が進んで小さいまちの町役場がなくなれば、そこでの求心力がなくなっていく。そのことによる地域の衰退。そして、役場がなくなる、そのことによる様々な業者もそこから離れていくというようなこと。そうします

と、若い人がそこからまた離れていくというような高齢化とかコミュニティの弱体という心配もあるという話をしたかと思います。

4回目は、そういったものとそういう課題の中で市民と地域歴史遺産を結ぶ、そういった新しいインターフェイスというものを作っていく必要があるんじゃないかということで、市民というものを主人公に物事を考えていくという話をしたと思います。指定管理という当時広まり始めていた問題点なども整理をしました。

1回目から4回目の協議会の中でそれ以後の大きなテーマになってくる地域歴史遺産の保全と活用。そして自然災害。そして市町村合併というような市民との関係というような大きなテーマのくくりというのが、ある程度ここでおぼろげながら整理がされてきたのではないかと考えています。

問題は、そういったものをどのように推進していくのか。そういった人材をどのように養成していくのか。これは大学側にも当然必要ですし、住民側にも必要であるということで、そういった問題を考えたのが5回目であります。

6回目につきましては、それまでの5年間の活動を振り返って、改めて地域歴史遺産の保全と活用のために何が必要かということを経験をいたしました。

7回目につきましては、先ほど申し上げた合併の話を再び取り上げております。合併の問題に対して知見をもっておられる京都大学の岡田先生に来ていただいて、御講演をいただきました。

8回目は震災から15年ということで、震災から15年たってそのときの資料、救出した資料は一体どうなっているのかというようなことを話をしました。

写真で見ていただいているのは宝塚で救出された和田家文書の救出状況の写真です。そのまま保全されておりましたので、この秩序を維持して整理をしました。これは、その後、古文書読む会を設けて現在も会は続いております。読んだものを広く市民にも公開しようということで、その右にある『源右衛門蔵』と申しますけれども、こう

いう冊子を毎年参加者の人たちがつくって公開をしています。私は、ここでボランティアの講師を今も続けているということです。

9回目は、どういう人たちが歴史文化を担うのかというようなことで、その人たちとの交流のあり方ということを考えました。大学でも、地域歴史遺産活用講座というカリキュラムを用意していただいていた。まさに大学側で人材をどう養成していくのかということに対する問題意識が整理されてきたというふうに感じています。

10回目は、もう言うまでもなく2011年の東北大震災を踏まえて、再び災害資料の問題を考えました。被災資料もそうですし、同時に震災で生み出された災害に関わる資料。避難所の資料などもあります。そういったものをどうしていくのかということも議論をしました。

11回目ですけれども。これは地元の人たちがどう楽しんでいろいろなことに関わってもらえるのかということで、どういうふうに学ぶということを取り組んだらいいのかということを考える。そういうことで新たな活動がいろいろ始まっています。そういったものを共有し、今日の趣旨説明とアンケートの中にもありましたけれども、ほかの団体の取り組みを知りたい。会員が減少し高齢化する中で、一方でほかの団体の取り組みを参考にしたいというニーズに応えていきたいという趣旨でございました。

12回目については、そこに書かれましたように、『「地域歴史遺産」の可能性』という本を地域連携センターがまとめることができました。これは、この12年ぐらゐの取り組みを整理し、そしてそれを論の形で意欲的に出したというふうに考えています。大学が様々なノウハウとか専門的な知識、専門知といえますけれども、そういうものを持っているわけですが、それがなかなか地域の中に還元しにくい状況があるのではないかと問題意識もあります。地域と大学との関係が希薄になってきているのではないかと問題意識。というようなことで、こういった大学の専門知というものをどのように地域に還元していっ

たらしいのかということも議論をしました。

この前後ぐらいから、様々な成果を上げている団体を意欲的に呼びかけて報告をしていただいて。そして、関係の強化というものを図ってきたと思っています。

13回目は、この頃から地域歴史遺産というものを何度も議論するという形になっています。そして、一つ、その中で共通認識が生まれてきたのが、やはり続けていくということの中では、おもしろい、学ぶことが楽しい。そういう発想がなければなかなか続かないのではないかなというようなことも共通認識になったかと思えます。

そして、文部科学省の「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」COC+という事業ですけども。これも、採択してもらうことができ、これには神戸新聞社も若干の御協力をして東京まで社員を行かせて文科省の質問に答えるというようなこともやりましたけれども。こういう地域の中で大学が地域創生の事業に関わっていく。そういったことの重要性というのが広く認識をされてきたのかなと思っています。

もう一つ、次に書いています、篠山のフィールドステーションの取り組みも非常に私にとっては印象深い活動でした。これは農学部が設けているフィールドステーションなのですけども、篠山に施設を持ってそこに学生が通い、そして学生が地域の農家のお手伝いをするような形で農業を学ぶというような、それが半端じゃない規模で学生が地域に通う。そして、それが単に授業やゼミだけではなくて、お休みの日に行って様々な活動をしたり、そして例えばお祭りですね。地域で祭りの担い手が非常に少なくなっている。そういうところに学生と一緒に関わって地域を盛り上げていく。そういう活動をされているわけですけども。それが農学部だけの活動にとどまらずに、文学部とも連携して古文書合宿なども一緒にやっている。学部を超えてこういった地域連携センターというものが様々な教諭と連携をしていくという、なかなかほかの大学では少ない、そういった取り組みもやっています。

このとき出会った方の当時の状況は、篠山市の統括政策監だったかな。そういう肩書ももらいながら頑張ってくれていました。現在は、神戸大学の発達科学部の准教授をされていますけれども、今回のことでまた一度話をする機会がありました。頑張ったなと思っています。

15回目は、そういったものをつなぎ育て場が必要であると。それは、場というのは単なる施設の場だけではなくて、人と人とが出会うそういう場としての場の重要性があるということで。大学にはそういった場を設け、運営していく。そういった役割を期待したいという話もありました。

16回目は、住民主体の地域史づくりということで、合併が進むと、自分の生活領域、生活感覚、荒っぽく言えば、近世の村、現代で言うと大字ぐらいのところは、自分の生活領域というかなり濃厚な生活領域という感じがするわけですけども。これがもう少し大きくなると、例えば、一つの谷筋、そういった谷筋で一つの生活圏が営まれているという、そういったものが組み合わさって自治体になっていっているわけですが。それが、そういった生活領域の論理とは全く切り離されて合併が進んでいっている。そうすると、住民にとっては、地域という自治体の範囲が地域という場合は、自分の生活領域とは物すごくかけ離れたものになってしまっているのではないかな。こういったものにアンチテーゼといったものを出す必要があるのではないかなと思っています。

そういったものの一つの取り組みとして、和泉市の谷筋をキーワードにした自治体史編さんとか、あるいは香寺町でやっていますような大字誌。大字誌というのは、沖縄なんかでも始まっていて非常に全国でも注目される取り組みです。そういった取り組みなどが取り上げられています。

それから17回目は、地域資料館というところで主に頑張っている尼崎市などを取り上げて、尼崎の先進的な事例などを学んだと思っています。

18回目は震災から25年ということで、震災のその後の活動、そして災害記録、そういったものをどう守ってきたのか、守っていくのかという

ことの共有をしました。

19回目は、コロナ禍の中で古文書を読む会が大変苦勞しながら活動を続けています。高齢化という問題とか、指導者の不足とかという悩みを持っています。そういったもののグループに集まっていたら、それぞれの体験を共有する。一方で、オンラインを使った古文書の活動みたいなものもあるよという紹介もありました。

写真は、私が関わっている宝塚の古文書を読む会の初心者講座です。寺子屋と呼んでいますけれども。古文書というのは長くやっているとだんだん読めるようになってきます。初めて入った方ともすごく実力差が生じてしまいます。ということで、初めて入ってきた方に違和感なくそういうグループに入らせていただくということで、習ってよく読めるようになった受講生が今度は教える側になって寺子屋を営むということをやろうということをやっているものです。

やっている場所は、この文書を保全してきた、そして今も保全している旧和田家住宅。これは市の指定文化財になっていますけれども、その座敷を借りてリアルに体験をしてもらうということをやりました。ただ、やはり最近のことで座ってやるというのは大変苦痛で、正座するというのはなかなかできないということで、これは今会議室でやっております。

等々、ちょっと走りましたけれども、19回の地域連携協議会を重ねております。それぞれのところでも申し上げましたけれども、それを整理し直すところのような到達点にきているのか、どのような成果が上がったのかということをもう一度私なりに整理をしたのがその次のお話になります。

あくまでも私の主観ですけども、研究成果というものについては今回の主要なテーマではないので省きました。この連携というもの、あるいは地域資料の保全と活用というものに焦点を絞って到達点と成果というものを整理をしてみました。

全体で7項目あがっています。

まず一つ目は、地域歴史遺産といった概念を当初から打ち出して、そしてそれを共通認識として

構築してきた、普及させてきたというのはまずあげられるべき到達点だと思っています。地域連携協議会が始まった年に、内閣府が災害から文化遺産と地域を守る検討委員会というのを設けました。そして、ここには確か奥村さんも関わっていたら、2004年にはこの委員会の中で未指定の文化遺産も保全の対象になるのだということ明記をしたという。これまでにない画期的な私は明文化された文章だと思っています。

そして、そういったものを普遍する中で、先ほど申し上げた『「地域歴史遺産」の可能性』という論集、これを2013年に発行しましたし。それから、神戸大学出版会。これは私も設立には関わらせていただいたのですが、その出版会の中での成果の一つということで、『地域歴史遺産と現代社会』というより分かりやすく教科書的な感じの、ちょっと高校の教科書のような感じもしないこともないんですけど。そういったものを出すことができました。これは、神戸大学出版会の確か一号の成果かな。ちょっと記憶が曖昧になってきていますけども。というようなものを出すことができました。これは、これまで申し上げてきた様々な取り組みを集大成する中で全国に向けての事例集であり、そして様々な取り組みのバイブルになり得るというふうに思っています。

2つ目が、自治体、地域、大学の連携の模索と事例の蓄積を続けてきているということになります。大学は、学生の教育とか研究といったものを超えて、こういったテーマについて積極的に役割を果たさなければならないというふうに自覚をいただいていたというふうに感じています。

先ほど幾つか紹介したカリキュラムは続けていただいていますし、また、結構大きな科研をとっていただいて、人材を確保し、そしてそれを途切れることなく継続をしていただいているというふうに認識をしています。こういうことを通じて、連携というものの意味の重要性というものを共有し、普及してきたのではないかとと思っています。

3つ目は、多発する自然災害への対処であります。地震という問題からスタートしましたがけれど

も、2004年の佐用町の大水害がありました。これは但馬の写真ですけれども、但馬も大変大きな水害を受けました。この茶色く見えるのは汚泥でありまして、私もこの現場に立ち会いましたけれども、一旦汚泥をかぶるとバクテリアが繁殖して臭いがひどいです。とても震災で被災をして傾いた蔵から救出した文書の整理とは比べ物にならない苦勞と手間がかかります。

したがって、これまではそういったものについてはほとんど組織的に継続的に救出するなどということはほとんど考えられなかった。そういったものを克服して新たな手法を考えて、そして取り組んできたというふうに思っています。これが、その後の東北大震災の津波被害による水損資料の救出、そして保全といったものにも応用されてきていると思います。そういったものの広がり、地震はあちこちでも起きてきました。それが全国への資料ネットの拡大といったものにつながっていったと思っています。

それから、4つ目ですけれども震災資料。震災でどのように避難所が運営されたのか、設けられたのか。そういったレベルまで資料として意味があるというふうに感じていましたが、そういったものの保全と調査のあり方をずっと取り組んできた。人と防災未来センターという兵庫県の関係施設との連携は続いていきますし、例えば伊丹市の博物館では、これは伊丹市の博物館の私や奥村さんが委員に関わっている地域等専門委員会なんですけれども、その中で資料集などを発行しました。例えば手書きのチラシみたいなものも資料になるのだというようなテーゼをきちんと打ち出して、震災資料のあり方を考えてきたというのは先駆的に取り組めたことだろうなと思っています。

5つ目は、人材育成という問題で。第5回の地域連携協議会以降、何度も人材をどう育成するかということに取り組んできました。そういった中で、住民が資料整理をすると。古文書の整理というのはこれまで専門家がすると。住民はそれを読みたいところを専門家が解説したものを使うという、そういう役割分担が暗黙のうちにあったの

ではないかと思いますが。それでは地域の資料は守られていかないと私は考えています。

これは、丹波の棚原というところで先駆的な取り組みをやったのですけれども。研究者と住民がペアを組んで文書整理をする。文書の目録をとって行く。ラベルを貼り、整理をする。秩序立てて番号順に資料を並べておく。そして、その管理は地元の人がするというふうにしないと、一旦大学が入って整理をしても、文書はその後、誰かが借り出したら元に戻さない。そうすると、そのうち散逸していく。そして、新たな資料が生まれてきたときに、それをどういう秩序でその資料群の中に入れていったらいいのかということが分からない。そういう意味では、住民自身が自分たちの守っている資料の整理に関わっていただかないと、その資料の新たな保全・整理はできていかないと考えています。

そういう意味で、私はそういうことをやっている方を「在野のアーキビスト」と呼んでいるのですけれども。そういったものもこれまで取り組みの中で育成ができてきたのではないかと。ふすまの下張り文書についても、結構いろいろな人が楽しんでお手伝いをしてれています。決して、研究者だけがそれに関わっているわけではないと思っています。

6番目は、合併の問題です。合併によって様々な資料が散逸するという話。それから、生活領域と自治体とが乖離していくという問題については申し上げました。それに対する大字誌という形で新たな歴史遺産の活用の仕方みたいなものを取り組んできたのかなと思っています。

地域史編さんは永遠に続くというのは、伊丹市の市史編さんが終わった後の当時の市長の言葉なんですけれども。これは非常に私は大事な言葉だと思っています。永遠に続けるためには、そこにいる人たちが永遠に営まなければそれは当然できないわけでありまして。そうしないと、また日常の中で資料が散逸していくと思っています。

7番目は、今までの整理の総合なんですけれども。文化財というのは国宝が一番上で、県指定が

あって、そして市町村指定がある、そして、未指定があるというような暗黙の序列があったかと思えます。でも、そういう序列に従わない地域歴史遺産という概念を生み出して、場合によっては国宝にもない価値がこの地域歴史遺産にはある。地域歴史遺産というのは、どこにでもあるけれどもそこにしかないもの。一番初めに絵図を見ていただいたと思いますけれども。ああいった絵図というのは、近世の古絵図というのはどこにでもあると言えばどこにでもあるんです。でも、その村を描いたその絵図はそこにしかないという意味で言いますと、それは本当にかげがえのない遺産であります。

そして、そういったものを守っていかうとすると、それはそこにある住民の人たちがこれは大事なものだというふうに思っただけなければそれは保存されない。いかに大学や行政が、これは大事だ、これは大事だと言っても、それを持っている人たちが大事だと思わなければ保全がされません。

そして、それは、やはり持っている人たちが活用するという機会がなければ保全につながらない。保存なくして活用なしということを一時言っていた方たちがいました。私はそれはずっと逆だと言っています。活用するからこそ、保全されるんだと。利用価値があるから守られるのだというふうに私は言ってきました。保全なくして活用なしとやってきた人たちというのは、保全するための箱を作れ、組織を作れ、アーキビストを養成するというような文書館の人たちがそう言ってきました。それを一体どういうふうに活用するのかということがきちんと位置づけられていないと、文書館や博物館にある資料は保全されますけれども、民間に置かれている資料というのはそれだけでは保全されないのではないですかというのが私の主張です。

そして、その活用する市民というのを生み出していく。市民と住民というのは、私はここでは分けて考えています。住民というのはそこに住んでいて、その地域に生活をしている人たち。市民と

いうのは、必ずしもそこに住んでいなくても市民研究者というのはいっぱいいますので、そういう人たちとは別に、住民が、そこに住んでいる人たちがそこにある地域の資料を使って自分たちの地域はどういう地域なのか、自分たちはどこから来てどこへ行くのかというような問題。それが地域アイデンティティーだと思うのですが。そういったものを楽しみながらやりがいを感じながら続けていく。そうしないと資料というのは保全されない、活用されないというふうに思っています。

ただ、これは一つ間違うと大変危険なお国自慢につながっていく。排他的思想につながっていくということで、歴史叙述は大変重要な性格も持っています。そういう意味では、それには科学性だとか客観性だとかが必要です。これには専門知の役割が非常に大きい。ここでは大学や自治体の役割が大変大きいのではないかというふうに思っている。この7つに私は到達点の整理をしました。

参加人数にありますように、11回目以降は100人ぐらいの方が参加をいただいています。ちょっと今回はオンラインはなかなか難しい部分はあるのかもしれませんが。

そういうことで、最後、もう2分ほどになりましたのでここでまとめに入ります。

アンケートにつきましては、井上さんから報告をいただいたのでほぼ割愛させていただきますけれども。やはりほかの団体から学ぶとかいうこと、悩みが高齢化であるとか、そして継続する意思はあるというようなことが報告されました。

ただ、今回アンケートをとる中で連絡もとれないところがあるとかいうものも出てきました。それから、協議会で報告していただいた以降、接触があるのかということについては、接触のない団体が少なからずあるということで。実は、このアンケートも私がやりませんかと提案をさせていただきました。アンケートの設問づくりにも関わらせていただいて、どういう活動をしているのかとか、今どうなっているのかというそういう現状も知りたいのですけれども。それ以上に、そういった団体が地域連携協議会というものをどのように

受け止めているのか。そして、そこからどのようなノウハウを得ているのか。そして、それがどのように活用されているのかということに私はむしろ関心があって、そういった設問を増やしていただきました。

そういう意味で言うと、地域連携協議会の有用性というのが大変あると思っていますけれども。まだまだ活動しているアピールが足りなかったりとか、それから、継続的に日常的に接触をするというそういう機会が乏しいかなということも思いました。

残された課題ですけれども、そこにあるとおりです。理念はできたけれども、実践の地域はまだまだ限定的である。事例は増えていますけれども、本当に意欲的、能動的な市民、住民というのは増えていっているのだろうかというようなこと。そして、既に続いていますけれども、今後も繰り返し続けていくということが大事であって、専門知に期待は非常に大きいと思っています。

そして、関わる人たち、本当にしんどい思いをしながら関わっておられる方もいらっしゃいます。あるいは、大学院生の人たちというのは職業として関わっているわけではないので、勉強もしながらということでもありますけれども。やはり、意義があるということの、その意義の共有をしないと義務ではこれは進まないと思います。そして、楽しみながらやるということが大事かなと思っています。

先ほど言いましたようにホームページなどで、情報がほとんど開示をされています。でも、なかなかホームページまでたどり着いて見ていただけるという方はそんなに多くないと思います。やはり、プッシュ型、メールなどを送っていくというようにそういうプッシュ型の情報発信。これを一々手間がかからないように一斉に送れるとか、何かそういう仕掛けというのをうまく作れたらかなと思っています。

大学というのは、当然マンパワーに限界があります。無尽蔵に教員がいるわけでもないし、大学院生がいるわけでもありません。そういう人たち

が関われる範囲というのは限られています。そういう人たちが一時地域に入っても、その地域から今度は離れても継続するようなそういった横のつながりであるとか、自走できる仕組み。住民が資料整理をする、管理をするという話をしましたけれども、そういったことが必要であるということです。大学とそれぞれの地域を結ぶ線から、その線だけではなくてそれが線同士が絡むような形で面を作っていく。そういうことが必要であると思います。

それから、公文書の問題についてはこれまで取り上げたことがあるんですけども。その後の展開の中では十分展開し切れていないなと思っています。非常に重要なテーマの一つであるというふうには思っています。

ということでちょっと時間をオーバーしましたが、駆け足になりましたが、これまでの取り組み、成果、そして残された課題について私からの報告とします。

御清聴、どうもありがとうございました。

報告②

丹波市での地域連携

～これまでと今後の課題

徳原 由紀子
丹波市教育委員会

丹波市では、平成 19 年度に人文学研究科と地域連携協定を結び、歴史資料等の調査、共同研究という形で地域連携を行ってまいりました。地域連携に関わっていただいたというか、先進的に取り組んでいただいている棚原の皆さんや、自治協議会での歴々の活動などでお世話になっている山内さん、そのほか活動で関わっていただいた方々からは以前の協議会でも御報告いただいておりますけれども、今回は行政側からこれまでの 14 年間を振り返るとともに、今後のリクエストなども含めて御報告をさせていただきたいと思います。

私自身、地域連携協定を結んだ当初の 3 年間ほどと、ここ最近の 3 年間にこの事業を担当してお

りますけれども、肝心の部分が中抜けになっていますので、内容的に不十分な点もあるかと思えます。また、今回、初めてのオンラインでの発表ということで、不慣れなためお聞き苦しい点があるかと思えますが御了承ください。

それでは、本題の地域連携についてお話します前に、丹波市の紹介と文化財行政の現状と課題などについて少しお話をしたいと思います。

丹波市は、こちら兵庫県の東端の中山間部に位置し、平成16年11月に旧氷上郡6町が合併して誕生しました。隣の丹波篠山市さんとは名前もよく似ていて混同されることも多く、正直、丹波篠山市さんの陰に隠れて存在感が薄いようにも思えます。

また、大河ドラマの「麒麟が来る」で丹波攻めが映るのではと期待もされていたのですが、コロナの影響で放映時間、回数も減って、観光面でも期待したほどの盛り上がりを見ることなく終わってしまったという感じです。

面積は493.21平方メートルで、県内で5番目の広さで、人口は約6万2,000人。小学校の校区を単位とする自治協議会は25ありますけれども、青垣地域では4つの小学校が統合され1つになり、また市島でも2つの小学校の統合が予定されています。御多分に漏れず少子高齢化が大きな課題になっています。

市内に目を向けてみますと、氷上町石生には標高約95メートルの本州で最も低い中央分水界があり、それから北西の地域は由良川となって日本海へ、水分れより南のほうの川は加古川となって瀬戸内海へと流れています。同じ氷上郡内でも2つの水系に分かれるということで、『和名類聚抄』にも西縣と東縣という形で分けられており、江戸時代に記された『丹波志』でも山西、山東と書かれたりしています。

銅印の出土した氷上町の市辺遺跡と春日町の山垣遺跡が郡衙関連の遺跡と考えられていますけれども、当時から水系ごとに分かれて役所があったので現在の丹波市でも氷上町の本庁舎と春日の分庁舎という形で2つに分かれています。

教育委員会は、南端の山内にありますので少し動きにくいという点もあります。江戸時代になりますと、氷上郡内は柏原に陣屋を置いた柏原藩が前期では3万6,000石と氷上郡内の約半分を占めておりました。しかし、3代で廃絶したために元禄8年に再び大和松山藩から国替えで新たに入封した後期柏原藩は、氷上郡と京都府の天田郡、何鹿郡合わせて2万石となったため、氷上郡内には柏原藩以外にも三田藩や亀山藩、鶴牧藩、また旗本領などが点在してモザイク状に所領が分かれるという状態でした。

このような文化的、歴史的な背景を持つ丹波市ですが、合併当初からの文化財行政の課題・懸案事項があります。

まず、一つ目が市史の編さんです。丹波市の歴史的なことを調べようとするとき必ず見る資料としては、『丹波志』があります。これは、寛政6年に天田郡、氷上郡、多紀郡の書物等をまとめたもので、市内に現存しているのは指定文化財にもなっている文化元年和田村の野添宗祇が氷上郡に関する部分を書き写し再編したものです。今年度から松下先生には氷上郷土史研究会の皆さんとこの野添本の翻刻、現代語訳をスタートしていただいております。

この『丹波志』以外には、昭和2年に刊行された『丹波氷上郡誌』や旧村誌がありますけれども、昭和30年の町村合併以降、現在の丹波市に至るまで行政誌のみの発行となっており歴史的な市史というものはつくられておりません。市史となると時間的にも財政的にもいろいろ大変な点があるかと思いますが、市史という形ではなくとも、通史的に分かりやすく丹波市の歴史を紹介できるような資料が必要と考えています。

2つ目の課題は資料館の統合です。

旧町時代に各6町に資料館が建てられていたけれども、旧町域を範囲としていたため丹波市全てを紹介するには規模が小さく、また合併により人員も少なくなり施設に常駐する学芸員が配置できないなど資料館として有効に機能していない点があります。施設の老朽化等もあり、平成20

年には山南歴史民俗資料館が閉館し、令和5年3月末には青垣歴史民俗資料館も閉館予定となっています。

現在ある資料館は、柏原藩主織田家伝来資料と、柏原藩陣跡に関する資料を展示する柏原歴史民俗資料館。こちらは、元禄の四俳女の一人、田ステ女に関する資料も展示する田ステ女記念館を併設しています。それと、七日市遺跡や野々間銅鐸、黒井城跡に関する資料を展示している春日歴史民俗資料館。そして、三ッ塚廃寺跡や梶原遺跡出土の考古資料などを展示している市島民俗資料館があります。

この中で、通常どおり開館しているのは柏原歴史民俗資料館と春日歴史民俗資料館だけとなっており、春日歴史民俗資料館については、来年度は土日祝日のみの開館の予定となっております。市島民俗資料館については、事前に御予約いただいたときのみ開館という形なのですけれども、これではせっかくいい資料があるのもったいないということで、今年度11月からボランティア有志の方々で月に2回程度開館していただけるようになりました。

それぞれの資料館にはそれぞれの特色があり、また史跡のガイダンス施設としての役割もあるために一概に統合することがいいわけではありませんけれども。合併当初から課題としてずっとあり、また統合資料館の構想はあるものの、今なお実現には至っていないという状況です。

ここからは少し宣伝になりますけれども、市内には歴史系以外にも博物館等がありまして、こちら昨年3月にリニューアルオープンしました水分かれフィールドミュージアム。そして、青垣いきものふれあいの里。教育委員会の隣にあります、丹波竜化石工房ちーたんの館、それから氷上町にあります植野記念美術館といった博物館等が丹波市内にはあります。また、丹波市にお越しの際にはお立ち寄りください。

3つ目の課題は、直接的には地域連携の中で関わっているものではないですけれども、最近かなり頭を悩ませている問題ということでこちらであ

げさせていただいております。もし、ヒントや妙案をお持ちの方がいらっしゃいましたら後で教えていただきたいのですけれども、柏原藩の藩校である「崇廣館部材」とその再建についてです。

藩校の崇廣館は、柏原藩陣屋の北西隅。ちょっと地図がないので分かりにくいのですけれども、現在の丹波県民局のテニスコートの場所に安政5年に建てられました。左の写真の赤で囲っている部分。窓が写っている二階建ての建物が崇廣館の講堂の建物になるのですけれども。こちらの建物、明治以降は小学校、氷上郡役所、柏原病院、日本自立聖書義塾というキリスト教の教会としても使われておりました。

写真に写っているような二階建ての建物になったのは、氷上郡役所時代の明治15年に二階を増築したという記録が残っております。この後、昭和8年になって場所を大手通に移築されたわけなのですけれども、平成になるまでずっと使い続けられていました。ただ、底地が民地であったことから文化財指定にはならないままだったのですけれども。崇廣館の建っていた一带に国の法務合同合同庁舎が建つことになり、当初解体撤去という方針だったのですけれども、藩校建築としても重要であるということで保存の要望のあったことから平成19年に解体し部材を保存することとなりました。そのまま再建については進展がこれまできなかつたわけなのですけれども今年度、部材を保管していた建物が売却されることとなり再び部材について注目されるということになりました。

議会からは2年以内に方向性を示せと言われていたわけなのですけれども、実際のところ、再建したいのはやまやまなのですがその資金をどうするのか。また、再建してどのように使うのか、活用するのか。再建できないときに部材をどうするのか、部材を置いておくだけでも価値があるというもの、保管するにもお金がかかると言われて、ちょっと悩ましい問題となっております。

こういった課題が合併当初よりある中、神戸大学さんから地域連携について声をかけていただきました。当時、春日町の柵原区の方より自治会の

区有文書等について御相談をいただいていたこともあり、神戸大学さんにも御協力していただきながら棚原区の古文書の整理が始まりました。

主にこの活動の中心に当たっていただいた棚原パワーアップ委員会の皆様には、積極的に古文書の整理に取り組んでいただき、この活動を市内に広げて古文書の悉皆調査ができればいいなという思いもあって、神戸大学さんとの継続的な連携を図るために平成19年に地域連携協定を結んだということになります。

これまでの事業の成果としてまずあげられるのが、古文書調査です。何百とある古文書群から数点のものまであり、また複数年にわたって行われた調査も1件としてカウントしていますけれども、件数を拾い上げてみますと自治会文書が16件、個人所有の文書が29件、社寺所有の文書が13件、神戸大学さんで御購入いただいた資料が4件、そのほかにも資料館等で所蔵している文書等の調査も5件行っていただいております。

自治会所有文書の調査では、地域連携の契機となった春日町棚原区のように古文書の整理、目録作成、写真撮影から住民の方に参加をいただき実施したところもあります。

棚原では、区有文書の整理、目録作成から始まり、これらを区民の方に伝えるための展示会や古文書解説会、ウォークラリーなどのイベント。さらに冊子の作成など様々な活動を行っておられます。公民館の新築に当たり、新たに古文書の保管場所も作っていただくことになりました。当初は、教育委員会の職員も一緒に参加させていただき、忘年会にも呼んでいただいたのはいい思い出です。こうして古文書を通してだけでなく、住民の方と共に活動することでさらなるつながりも生まれました。

また、同じく春日町の歌道谷区でも目録作成から参加いただき、古文書の展示会や市民講演会が行われました。氷上町氷上区では、約600点の区有文書の整理に住民の皆さんにも参加していただいていた実施し、その成果として『氷上区有文書の世界一解説と目録』こちらの写真ですけれども、

こういったものを刊行しており、目録贈呈式と展示会、記念講演会を開催しました。その後も、氷上古文書倶楽部として区有文書の解説会等の活動を続けていらっしゃいます。

また、青垣の山垣区でも住民の方にも参加していただきながら資料の調査等を行いました。

こういった古文書調査を続けながら、その調査成果を活用し市民の皆さんに還元するために平成22年度より歴史講座を年6回開催しています。なぜ6回かといいますと、これは旧町ごと、各旧町の6町で開催しているということで、その地域に関することをお伝えするとともに、水損資料のワークショップやフォーラムなども開催しました。

講座終了後には、古文書相談を受け付け、どのように保管したらいいのか分からない、読み方が分からないといった相談を受ける場にもなりました。その相談から新たな古文書調査につながることも多くありました。また、昨年度からはコロナ禍の中で動画配信も開始しております。

また、市の広報では隔月で「歴史探訪ふるさとを見直そう」を掲載し、歴史講座の内容や古文書調査の成果を伝えています。今年1月号で121回目を迎えました。

また、調査成果をまとめたものという形で『丹波の歴史文化を探る』、『ふるさと丹波の歴史を読む』という冊子2冊を発行しております。

一番下は印刷物ではありませんが、翻刻資料として柏原歴史民俗資料館が所蔵する全部で78冊の藩政日記のうち、天保14年の藩政日記と旗本佐野家の代官を勤めていた上山氏の幕末用状控帳をオンデマンド資料として文化財課のホームページに掲載しています。御興味のある方はホームページをのぞいてみてください。

調査成果の発表の場として資料館でのコーナー展示や企画展も開催いたしました。連携協定を結ぶ前ではありますが、平成18年度に県教委との共催による地域文化財展「古代氷上郡の役所と村」で取り上げられた棚原地区の山垣遺跡を展示のエピローグとして、「地域の人々にとっての山垣遺

跡～地域の歴史遺産を活かしたまちづくり」と題して、近世から近代の山垣遺跡の様子を地元柵原に残る古文書や絵図、古写真などで紹介するコーナー展示を、地元の方にも協力・御参加いただいで実施しました。

平成28年度には、柏原歴史民俗資料館で調査した上山家文書と関連する写真などを中心に「上山家文書にみる幕末維新の丹波」と題して企画展を行い、先ほどオンデマンド資料としても御紹介しました「上山治郎右衛門幕末用状控帳」をこの企画展に際して行った記念講演会の際に参加者の方には冊子としてお配りしております。

令和2年度には、歴史講座で取り上げました資料を実際に見ていただく機会として、ミニ企画展を柏原歴史民俗資料館、春日歴史民俗資料館で開催しました。そのほか、市教委が直接運営や活動に関わる形ではありませんが、自主運営や自治協議会等との連携で新たな活動が広がっています。歴楽は、現在市の文化財保護審議会委員、資料館運営委員会委員でもある山内順子さんの発案で、サイエンスカフェをモデルに地域史でも同じような活動ができないかと、地域の歴史を楽しむ気楽な雰囲気の中で語り合うという意味を込めて「歴楽」と名づけられたものです。現在まで5つの自治協議会で行われており、講演の後にお茶とお菓子を楽しみながら質問や情報交換の時間を設けて行われています。

夏休みには、児童向けの歴楽 KIDS を開き、その成果を夏休みの自由研究としても発表されています。参加者は子供たちとその親、また年長者まで幅広い世代に広がり、当初の思いのように気楽な雰囲気の中で情報、意見交換が行われています。

また、古文書調査を行った資料を市民の皆さんで解読する場が持てないかということで始まったのが「丹波古文書倶楽部」です。これは、市の生涯学習部局の事業であったT A M B A シニアカレッジのクラブ活動として平成22年度に開催されたものなんですけれども、最初の1年間のみ市の活動、事業として行われたのですけれども、翌年からは自主運営という形で現在も活動されてお

ります。講師は木村先生にお世話になっていました。月1回のペースで開催されております。

地域連携を始めた当初の計画では、柵原のように住民自らが資料整理や調査に関わり、自分たちの住む地域の歴史を再発見しつつ、このような活動を市全体に広げて古文書の悉皆調査を進めていきたいというものでした。

しかしながら、なかなかうまくは行っておらず、住民の方々が参加しての調査は4カ所程度ということになります。また、整理、目録作成と展示会までは活動が続くものの、それ以降も継続的に資料を活用した活動を行っていただいているというところはさらに少なくなります。

これまで14年間の事業を簡単に振り返ってみましたけれども、とても教育委員会だけでは古文書調査をはじめとするこれらの活動は実施できるものではなく、これまで知られていなかった多くの古文書を把握できたことは大変ありがたいと思っております。また、丹波市では、テーマを絞り込み過ぎていないため、臨機応変にその場で対応できることが多く、様々な資料調査ができたのではないかと考えております。

文化財課の事業としては、歴史講座と古文書調査を大きな柱としてきましたが、この間、独自に会の企画運営に取り組んでいただいたり、行政と郷土史研究会との橋渡しを行っていただいたり、新たなつながりや事業の広がりが出てきたのではないかと考えております。

今年度には松下先生にもお世話になっている氷上郷土史研究会が行われている円通寺の下張り文書展を柏原藩陣跡内の展示室で開催しました。

しかしながら、14年間という長期間にわたる調査活動ということで、双方の担当者が変わることもあり、全ての調査を1から10までこれまでの調査内容を把握し、整理というのができていないという面もございます。

今回、このような形で報告させていただくに当たり、今後の文化財保存活用地域計画策定に向けて、これまでの調査の整理等を行うことができたが、この調査内容はこれからの計画策定に向

けても基礎資料という形になります。

今後も、引き続きお世話になっていく予定ではありますけれども、そろそろ通史的なまとめ等が必要な時期にはなりますでしょうし、先に触れました丹波市の課題というか懸案事項であります、市史や統合博物館に向けても必要になってくるのではないかと思います。

また、丹波市の基本的な資料として御紹介した『丹波志』の翻刻もあるんですけども、柏原の藩政日記も柏原に行く前の大和光山藩時代から残っており、こちらも丹波市の歴史を理解するためには必要不可欠な資料で翻刻したいなと思っております。これは双方のニーズというか、優先順位が合っていないかなという部分ではあるのですが、そういったことも考えております。

あと、共同研究ですので市としても主体的に動くところは動いていかないといけないのですが、その点が不十分で、神戸大学さんにお任せということが多くなってきていて、その点は改善、また反省しないといけないかなと思っております。

べたなタイトルであり内容もない報告となりましたけれども、地域の中で積極的に活動していただける方が増えてきて、今後、さらに地域連携の輪が広がって充実していけるようになればと考えております。

以上をもちまして、丹波市との地域連携について御報告を終わらせていただきます。

ありがとうございました。

報告③

『村の記憶』を書き継ぐために

大槻 守
香寺町史研究室

皆さん、こんにちは。香寺町史研究室の大槻でございます。実は、皆さんのようなりモートに合わせたような資料を用意しておりませんので誠に申し訳ありません。今映していただいております。

す、お手元にもお配りをしておるかと思いますがレジュメを見ながら少し話をさせていただくことにいたします。

資料の年表はまた隨時見させていただくとして。私が今回報告をさせていただきますのは、香寺歴史研究会の活動とそれの持つておる課題、今後の展望と。そういう内容ということでお聞きいただけたらと思います。

香寺歴史研究会は、年表にもありますように発足して18年になります。その間、地域連携センターに大変お世話になっております。今回の発表の中では、一番私どもが地域連携センターと関わりをもった団体の一つではないかと思ったりしておるのでございますが。

私どもができましたのが、先ほど申しましたように18年前。ちょうど連携センターと歴史的な歩みは同じようなものであったと思います。神戸大学の地域連携センターが大震災を受けて、その後それに対応しながら活動を展開されてきました。私どもは、ある意味では香寺町が消滅し姫路市に合併するというのが今までの18年の歴史の中では大きな試練ではなかったかと思っております。その中で、どういう形で地域での歴史研究を継続していくのか。私たちは何を書き継いでいくのかということを考えてまいりました。

その原点になっておりますのが、そこに『村の記憶』と書いておりますが、『香寺町史』であります。あるいは、お読みいただいた方もおありになるかとは思いますが、住民自身が書いた町史だということではいろいろな意味で評価していただき、あるいはいろいろな御意見を頂戴いたしております。

私どもとしましては、この村の記憶を何とかして書き続けていくということが一つの使命ではないかと、こう思ってまいりました。町史を書いておられますときのスローガンが思い出すのですが、当時はこういうことを言っておりました。「思い出し、記録し、伝える」ということであります。

皆さんが今までの体験の中からいろいろなことを思い出し、それを後世に伝えていこうではない

かということ話し合ったことを思い出します。何を伝えるのかということになりますが、地域連携センターのおっしゃる地域歴史遺産という言葉になるかと思いますが、私どもはそういう固い言葉ではありませんが、私どもがどうしても伝えておきたい、次の世代に残していきたいということを自分たちで、地域で探しながら、あるいは自分たちの経験の中で伝え聞いたことの中から何を残していったらいいのかということを考えてきたように思っております。

最近の活動を中心に申し上げますと、そこにあげておりますように、平成18年からここ数年間の活動のテーマだけあげておりますが、私どもは、香寺歴史研究会の会員自身が研究する、会員自身が記録する、「村の記憶」といいますが、それと同じ方向を現在も続けております。ほかの団体とはある意味では活動内容が違っておるのではないかと思いますけれども、私たちはこれによって自分たちの暮らしの変化を残せるのではないかと思っております。

最近のテーマを御覧いただければお分かりいただけますように、一つは山と地名、川と暮らし。山と地名も山と暮らしと言ってもいいんですけれども。山と、あるいは川とどう結びついておったのかと、自分たちの暮らしが。あるいは、人々の横のつながりもどうであったのかということをおうテーマを通じて考えてきました。

そういうものを一つのマップにまとめたのが2020年の『昭和30年代 ふるさとマップ集』と、こういっていいかと思いますが。私どもとしては今までの活動の一種の集大成的なものではないかと思っておりますけれども。自分たちの、今会員は後で申しますように60代、70代でありますけれど、自分たちの子供の頃、見たり聞いたりした風景、体験したこと。それはさらにそれ以前の先祖から伝わってきたものであったと思いますけれども。それが、自分たちが生きてきましたそういう年の間に全く変わってしまったということをお改めて実感しております。

よく私どもは申すのですけれども、この100

年の明治維新以後の変化はあるかと思えますけれども、私どもにとっては高度成長以後の変化のほうが大きかったのではないかと。暮らしそのものが変わってきたと、こう思っています。

そういうものを何とか記録しようということで、現在、『村の記憶』に次ぐシリーズとして『新村の生活史』という本を毎年1冊ずつ調査しました結果をまとめて発行しております。『昭和30年代 ふるさとマップ集』は、その第4集という形になっておりますが、そういった会員自身が自分たちの村を調べるということをやっておりますけれども。

それと並行する形で大字誌の編さんを進めております。これは先ほどの年表を見ていただいたお分かりかと思いますが、2010年大字誌、相坂に始まって、それからずっと年表のところにあげておりますように2012年から一番新しいところは2020年まで、8自治会の大宇誌の編さん状況をあげておりますが。一つはそういう大宇誌を何とか続けていこうということも一つの大きな目標にしております。

大宇誌の編さんをするということは、自治会との協力を進めるということでもあります。地域の皆さんと結びつく活動をするということでもあったと思っておりますけれども。現在、大宇誌は8自治会で、実は藩政時代の村が20カ所もありましたのでそのうち20分の8というのは多いというか、少ないというか、よく分かりませんが。住民が本当に作ろうという意志を持って積極的に作ったという点では、一定の評価をしていただいております。先ほど大宇さんも申されました、大宇誌の編さんということの意味をお改めて考えておるところです。

それともう一つ、私どもの活動の中で最近力を入れておりますのは、地元の中学校と連携して、中学生に次の私たちの地域を担ってくれると思われる中学生に伝えていきたいということでもあります。私どもは、子供の頃を振り返ってみますと、自分の親、あるいはおじいちゃん、おばあちゃん、近所の大人からいろいろ話を聞いております。そ

れによって村の歴史や村の行事、村の暮らしについて学んだというか、自然に教えられたとお感じなのですが。残念ながら、私たちは現在、子供でなしに孫の時代、あるいはひ孫になってくるのですけれども、そういう孫に話をする機会がほとんどない。残念ながら。子供たちともそうであったように思いますけれども、さらに孫の世代になりますとそういう機会はほとんどない。

これは当然だろうと思いますけれども。私どもがどういう場所で年寄りから話を聞いたのかというと、やはり一緒に生活しておたからだ。特に、例えば山や田んぼへ一緒に出かけます。そのときに行き帰りや、あるいは休み時間に話ができるというようなことであったと思うのですね。

今、孫に話す機会はそういう意味ではない。孫と一緒に何かをするということは考えられないわけですね。私自身、孫に何か聞かれたと言えば、学校で宿題があったから、「おじいちゃん、この頃どうしてたの。」とこういうことを言われた。戦争中どうだったと聞かれたことがありますけれども、改めて子供の勉強している机の横に座って話をするというようなことは普通はないわけですね。そういう意味では、現在、中学生の皆さんと話す機会を与えられたということは大変ありがたい機会だと思っています。

会員自身が子供たちに自分たちの住んでおる地域を案内し、そこの説明をする。そのときには、当然、村の古い歴史の史跡にも触れることになります。そういう形で地域の歴史遺産を引き継ぐことができているのではないかと、こう思っているのですが。

私たち自身も、会員自身も、中学生に伝えるということで地域の歴史に改めて気づき調べようという気持ちになっております。そういう中学校との連携が2019年から始まっておりますが、これは大変私どもにとってはありがたい、うれしい機会だと思っています。そういった活動を発表する機会、会員だけではなく自治会や中学校にも呼びかけて一緒に聞いていただいたり、中学生自身にも発表していただいております。そういう形

で中学生に伝えるということは、自分の経験を伝えると同時に、また村の歴史を伝えることになっておるのではないかと考えております。

それから、もう一つ、私どもとしては定期的に今まで毎年会報を発行しております。活動内容を記録に残すということも大事ではないかと思っています。これが続けられておるということは大変私どもはうれしく思っております。

それと、これとの関係で自治会との協力、先ほど大字誌で申しましたけれども、自治会との協力関係も非常に大事だと思っています。地域の団体だけの活動ではなしに、地域で一緒に活動すると。最近の川や山のことに関しましても、会員が全ての地区にいないという関係もありますけれども、全部の地区でそれが町内で行われるように自治会にもお願いして一緒に参加してもらっております。

何よりも、先ほど申しました大字誌の編さん。これは自治会の事業としてやっております。かつて、大字誌とかそういったものは個人でされている場合が多かったかと思うのですけれども、私どもはそれを自治会の事業として進めていただいております。それに、研究会の活動は会員が参加するという形をとっております。それによって、地域での理解が深まるのではないかと考えております。

それと同時に、会員も次のところに書いておりますように高齢化しまして、かつての状況を知らない方も増えてきておるのですけれども。それと同時に、自治会の会員も若返っております。そういう方との交流もできると、こう思っております。

これまで活動が続けてこれましたのは、地域連携センターとの連携があったからだと思っています。その上で、ちょっと年表を見ていただきますと、その点の情報を関連させて年表に書いております。

歴史研究会の活動と、それから地域連携センターの活動と横に並べておまして。御覧いただいておりますように、折に触れて地域連携センターにお世話になっておる。連携という指導をい

ただいとおると言っているいいかも分かりません。

最初の『香寺町史』編さんの時期から、奥村先生を初めとする大学の方々に編さん委員として、あるいは顧問として協力していただいております。それも、『村の記憶』から『村の歴史』の編さんに至るまでそういった関係がありますし。地域連携協議会も、私どもが積極的に参加したのは第3回からだと思っておりますけれども。それからほとんど毎回参加し、いろいろなことを情報を聞かせていただき、それが私どもにとっては大変刺激になったし活動を継続することになったと思っております。

とりわけ、先ほど申しました姫路市への合併ということ。それが実は『香寺町史』の編さんにとって非常に危機的な状況になりまして、合併に伴って『香寺町史』をどうするのかということになりました。

『香寺町史』を合併しても続けるということで決まりましたが、それをどういう形で続けるのかということでした。その辺で神戸大学との協力関係があったから、合併以後に『村の歴史』通史資料編が発行できたと思えますし。特に、合併で町史編集室がなくなったということで新しい拠点を私どもが今入っております、実はこれは犬養公民館の一室からお話をしておりますけれども、犬養公民館そのものを借りることができたのは神戸大学のお力でありました。そういう意味では、非常に私どもの活動を支えていただいたと思っております。

そして、大字誌につきましても、第1回フォーラムをそこにあります2011年から開いておりますけれども、2011年フォーラムも地域連携センターとの共催で行うことができました。それから以後、回を重ねておりまして、そこにも第4回フォーラムまで書いておりますが、そういう毎回講師としておいでいただいておりますし、いろいろなコメントも頂戴しております。そういう形で活動が現在まで進められてきたということで、大変ありがたいことでもあります。

しかし、それでありますが、そこに課題と書いておりますように、前件のアンケートからも出てきておりましたけれども、やはり問題は高齢化だと。一応60代以上と書きましたけれども、中心になって役員になっていただいております方は70代以上ということになりました。『村の記憶』から20年とありますように、そうしますと、当時実際に関わった方がもう研究会のメンバーから離れられることが多くなってきました。残念ながら亡くなられる方も続いております。そういう形で会員が減少する。高齢化というのはこれも同じようなことでありますが、それと会員が減少するのは最近の定年延長、あるいは再雇用だという形で60から65、70という形で働いておられる方が多いわけですね。それで、現在働いておられる方も地元の企業ということはありませんので、地元を離れて近くで姫路、遠くになりますと神戸、大阪。あるいは、実は就職しておった、働いておった頃はこれは市外であったということ、県外であったという人も多いわけですね。そんな形でやっておりますのが非常に問題であろうと思っておりますが。

こういう活動を支えていただいた地域連携センターと同時に、もう一つは自治体との連携はどうかということでもあります、私どもは市史編集室と当然、関係が一番深かったんですけども。市史編集室自身が編さん事業は間もなく終わると聞いております。私どもは市史編集室に収集しました資料をお預けしておりますけれども、これはどうなるのかということは大変危惧を抱いております。市のほうでは、文書保存庫をつくるということをお聞きしております。ただし、これは公文書の保存が中心でありまして歴史資料をどうするのかということがあろうかと思っております。

もう一つは、自治体は市民活動推進室というのがありますので、そこに私ども活動資金、会員減少に伴う資金が経済的な問題がありますが、それを助成事業によって補うという形で援助していただいております。

それから、図書館に郷土資料をきちんと保存・

活用できるようにしてほしいと願っておりますが、これもなかなか進んでおりません。特に、活字以外のものは収集しないというふうには姫路市では言われますので、大変資料保存については問題であろうと思っております。

行政では西播磨県民局がありますが、今のところ直接のつながりはできておりません。これはどうしても県民局の助成が今はこの辺では銀の馬車道が一番言われますし、それに伴うイベントが中心になっているということもあろうかと思っておりますが。

先ほども申しましたような地域連携センターとの関係で私どもは非常に助けていただいて今日に至ったということでもありますけれども。地域連携センターとのつながりだけではなしに、そこにありますように地域のほかの団体とのネットワークがあればさらにより励まされるのではないかと思います。そういう情報交換の場が地域連携センターである会合であることによってできておりました。先ほど申されましたように、コロナでそういう場がなくなったと同時に、実はそういう新規の歴史研究団体との交流の仲立ちを積極的に地域連携センターでしていただけないかということをおもっております。神戸での会合でもいいし、あるいは地域のごとに、例えば西播磨でどこかに集まって年1回ぐらい話し合いをしようではないかということをやっていただけるとありがたいと思うのですが。そういう行政でお願いすればいいのですが、行政でそれをしてくれるところが今のところはないということが非常に残念であります。

私ども、実際に情報交換できるのはそこに書いておるような状態しかありません。今後、そういう団体同士、あるいは地域連携センター等を介してさらにつながりができお互いにもっと情報交換し、あるいは調査についての手法や会の交流ができればどうだろうかと思っております。これからも長い研究活動ができますように、地域連携センターにお願いしながら、私どもの報告をさせていただきます。

ありがとうございました。

報告④

地域連携センターの20年

木村 修二
神戸大学大学院人文学研究科

はじめに

地域連携センターの木村です。よろしくお願いたします。

私の報告タイトルは「地域連携センターの20年」ですが、先ほど大国さんが地域連携協議会を中心にお話を組み立てられました。私も、当然地域連携センターと言えば地域連携協議会が1年の総決算のようなつもりでやってきましたので、協議会を中心にお話をするということも考えたのですが、大国さんが協議会を中心にお話しされるということが見えてきましたので内容を変えまして、地域連携センターがこれまでどういう活動をしてきたか、事業内容についてお話をさせていただくというふうに切り替えました。なので、協議会につきましては今回、あまり触れないでいこうと考えております。

センターの開所から20年ということですが、20年という私たちにとっては、長かったような、短かったような不思議な時間です。

まず地域連携センター開所までですが、先ほど冒頭に奥村さんがお話をされましたように、阪神・淡路大震災という事態になりまして歴史資料保全情報ネットワーク（現歴史資料ネットワーク、以下「史料ネット」）が活動を開始されたわけですが、その後、史料ネットの活動が展開してゆく中で、非日常的な保全活動もさることながら、日常的な活動がやはり大事なのではないかという認識を持つようになります。そうして、この後お話しするような、様々な日常的な活動というのが必要なのだろうという認識のもと、地域連携というような発想が生み出されてきたのかなと想像するわけです。

私は地域連携事業の立ち上げの前には関わっていないわけですが、2002年に文部科学省から大学改革推進等経費というのを1年間、実質的にはもう半年もないような短い期間だけでしたけれども交付をされまして、11月27日に辞令が交付されました。この3名のうちの一人が私ということです。このときには、今は兵庫県立歴史博物館のひょうご歴史研究室に移られました坂江渉さん。あと、本日も参加されている佐々木和子さん。この3名が一番最初の地域連携研究員でした。

当初の地域連携研究員は、まず坂江渉さんが担当されたような全体を見渡すというような立場に対し、私や佐々木さんのような個別の事業にそれぞれ関わってくという立場という、大きく分けて二通りの立場があったと思います。後に、その年度内にも研究員が2名追加されまして、翌年度以降さらに何人か追加されていくという形で地域連携研究員そのものは広がってきておりますし、その後も事業の展開が進んでいったわけです。

坂江さんのような立場と違って私はどちらかという現場のほうにずっとこの20年間関わってきました。そういう立場の人間が語る地域連携センターの20年というのは一体どういうものになるのかということもありません。要するに、上からのメタ的な部分の語りをするべきなのか。あるいは、私自身の個別の話をしたらいいのか、今回の内容をまとめるにあたってかなり迷いました。しかしながら結局のところ、今まで私自身のまとめとして地域連携センターのこれまでを振り返るといった機会がなかったので、私自身の経験をふまえながら、私自身が知らない部分は年次報告書などの資料に頼りつつ私なりのまとめをさせていただこうと思って今回話を組み立てております。

1 4つの柱と「変化」

さて地域連携センターといいますとホームページや三つ折りパンフレットなどにも書いてありますように、4つの柱があります。この4つ柱については地域連携事業の初めの頃から語られている

わけですが、実は、この4つの柱にも活動の進展とともに微妙な変化があるということに振り返る中で気づきました。

一番始めの立ち上げ当初、どういうふうな議論があったのかということは、先ほども申しましたように私自身は知るよしもないわけですが、活動をするということに当たって文科省に申請をするだとか、そういった段階でも「柱」については議論されていたんだろうなと想像します。

地域連携センターが最初に発行した事業報告書『平成14年度「歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業(報告書)」』をひもとくと、柱の第1としてまず「地域歴史の保存・活用についての自治体・諸団体との協議会等の継続的開催」を挙げています。これが、大国さんも語られた地域連携協議会を開催することが前提になっています。それから第2に、「自治体・地域住民と連携した新たな自治体史や地域歴史博物館形成事業」。これは、自治体史編さんというところがクローズアップされるような柱といえると思います。第3に、「自治体・NGOとの協力による歴史資料の保全事業」。これは、一番念頭に置いていたのはやはり史料ネットワークです。歴史資料ネットワークの活動にセンターとしても協力していくというような形での部分の柱。さらに、これもやはり歴史資料ネットワークとも関わりがあるのですが、第4として「阪神・淡路大震災資料の保存活事業」ということで、この辺りは初期メンバーの一人である佐々木和子さんの個別の活動が反映されたような柱になっています。それぞれ、初期のメンバーが関わっている事業がそれぞれの柱に反映するような形になっているといえそうです。

次に、基本的な骨子は変わってはいませんが、2005年頃になりますと少し変化があらわれます。坂江渉さんが2005年にまとめられた段階の部分ですが、まず第1に、当初から掲げられている協議会を実施するといった部分。それから第2に、具体的な連携事業。これも2002年の地域連携事業の立ち上がり以降様々な活動が増えて

いく中で、自治体やN G Oとの具体的な連携事業というものが増えてきたというのが反映されております。第3に、自治体史編さんというものも、当初、『播磨新宮町史』だとか、先ほど大槻先生からお話がありました『香寺町史』とか、そういったものからさらに幾つか増えてくるという中で柱の一つとして挙げられてきたといえると思います。そして第4に、ここはやはり外せないということですが、阪神・淡路大震災関連資料の保存・活用といった部分ですね。こういった4つの柱になります。

基本的にはあまり変わっていないようにみえますが、大きく変わるのは第3段階目の2010年頃以降です。今は新しいバージョンに変わりましたが、古いセンターのリーフレットでありますとか。あるいは、2013年に発行された『「地域歴史遺産」の可能性』の中で坂江さんがまとめられているところによりますと、4つの柱の構成が、変わっている部分と変わっていない部分、さらに新たに付け加わっている部分もあります。

まず第1の「地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進」ということは、やはり地域連携協議会というものを核にしながらも、後でもお話しします『LINK【地域・大学・文化】』という雑誌の発行でありますとか、今ご紹介しました『「地域歴史遺産」の可能性』という本の出版という形での発信をしつつある状況がここに反映され、さらに、大学間連携ということも動き出しておりますから、そういった内容も第1のカテゴリーに入ってきています。

次に第2には「地域づくり支援と自治体史編さんの協力」ということで、これも当初から外れてきていない部分ですが、自治体史編さんもさらにその後加わってくるような形で発展していますが、様々な地域での活動なんかの支援という部分をこの第2のカテゴリーに含められたように思います。

さらに第3の柱も当初からのものですが、やはり先ほどの大国さんのお話でもありましたが、我々が地域連携事業というのを立ち上げて以降も

大小様々な災害が発生しているという事情が影響しています。2004年には台風が10個も日本列島に上陸をして、但馬地方だとか丹後地方とか、そういったところに大きな被害をもたらしたということも記憶されている方もおられるかと思いますが、2011年の東日本大震災はいまだに復興へむけた活動が続いているわけですから。そんなところへの対応ということで、阪神・淡路大震災への対応という部分がむしろ具体的な災害名が外れるかたちで、災害時の歴史資料の救済保全という部分に変わっていったというように変化してきたということです。

最後に第4に、これが新しい部分ですが、「地域遺産を活用できる人材の育成」という項目が新たな柱としてこの段階で加わっているということが見えてきたのかなと思います。この20年の短い歴史の中にも、そのときそのときの社会の変化も含め、事業の展開の反映という形で「4つの柱」も変わってきているということでもあります。

2 地域連携センターの前期／20年～『「地域歴史遺産」の可能性』以前

2013年の『「地域歴史遺産」の可能性』のなかで、坂江さんが紹介をされてきたのですが、ある地域資料の保全に関わっている方が、保全にとってこれからの10年が大事だという発言があったことが紹介されています。今現在、もうそこからほぼ10年が経とうとします。現状はどうなのだろう。そういう中であってのこの20年の振り返りということになってきますので、そのあたりが今回どれくらい変化しているのかなということも地域連携センターの過去を私自身が振り返る中で注目した点でもありました。

センターのパラダイムとしましては、基本的には10年前から大きな変化はないような、そんな印象も受けたわけですが、その辺を具体的に見ていきたいと思います。

とりあえずは、前期と後期に分けさせていただきました。前期といっても20年のうちの相対的な意味での前期ということで、20年分の10年

と単純に時間で区切ってはおりません。前期と後期の間というのはいろいろな事業だとか様々な部分で重なり合う部分があるでしょうし、この日を境に前期、後期と分けることはなかなかできないと思います。それでも、やはりこの『「地域歴史遺産」の可能性』という本ができた段階というのは大きな画期になるのかなと思いますので、これができる以前と以後ということで一定の基準にはなるかと思っています。

実は、その『「地域歴史遺産」の可能性』の中で坂江渉さん自身がそれまでの10年と言いましょうか、私が今前期とした段階の部分についての総括、振り返りというのもされております。だから私がここで下手な話をしなくてもそちらをご覧いただければいいのかなとも思うのですが、全く地域連携センターのことをご存じない方も本日はご参加されておられるかとも思いますので、簡単にどんな事業展開があったのかということに触れていきたいなと思います。

今回大槻先生が触れられた香寺での事業、徳原さんに語っていただいた丹波との連携事業といったように、事業ごとに年表みたいなものを用意するほうがひょっとしたら分かりよいのかもしれませんが、事業の数があまりにも多く、それを一つ一つやっていると時間も手間もかかるということで断念いたしました。そのために、今回それぞれ紹介する内容が薄くなってしまいますことをあらかじめおことわりさせていただいたうえで、以下紹介、させていただきます。

私なりの整理ですが、まず第1に、地域連携センターが立ち上がった頃。やはりパイロット的事业というものがあります。地域連携研究員自身がどんな専門分野を持っていたか。私であったりあるいは佐々木和子さんが担当していた「事業」があります。坂江渉さんは古代史の専門家の方ではありますが、どちらかというと地域連携事業そのものの全体を見るという、そういう役割で就任されたように記憶しております。それ以外にも史料ネットという存在があって、地域連携研究員以外にもいろいろこの事業をフォローしていた

だくような、例えば今日も名前がたびたび挙がって松下正和さんとか、そういった方との関わりや協力があって進められてきたというところがあるわけです。

結局、これが4本の柱の前提にもなったわけですね。例えば、「阪神・淡路大震災資料の保全事業」。これは人と防災未来センターと神戸大学とが連携するような形で、佐々木和子さんが担当するような形で進められました。一方、私が直接当時担当していたのは、あまり聞かない表現でしょうが「東神戸」、簡単に言うと、神戸市の灘区と東灘区という地域ですけれども、その「東神戸を中心とする文献資料所在確認調査」という、これはまさに史料ネットがこの辺りを震災直後、レスキュー活動であるとかパトロール活動とかそういったことをされる中で、いわゆる非常状況下においての活動の中での困難さというものがあった経験を踏まえ、たとえば文献資料の所在確認というものを所蔵者との間で確認し合うということが平常時において成しておくべき活動ではないかと考えて地域連携事業の一つの事業として位置づけられました。だから、この場合、活動の連携先となりましたのは神戸市、特に神戸市文書館というところとの連携というものをさせていただきました。

当時、地域連携センターが立ち上がってすぐに、坂江さんとともにいろいろな自治体を巡って私たちの事業の趣旨を説明させていただきましたが、自治体の側は地域連携ということをはっきりイメージできない部分があったのではないかと想像いたします。それでも神戸市文書館の方々は、当然のように現れた私などへもすごく協力的に接していただきました。その中で、財産区というものを調査対象にしてみたいということも考えまして、当時の神戸市文書館や市役所の管財課の担当の方へ調査協力をお願いをいたしました。財産区というのは自治会とはちょっと違いますけど、神戸市域におきましては非常に重要な意味を持っている地域団体です。いわば、大字とか江戸時代以来の旧村の流れを直接引いているような団体といえましょうか。そういった存在でありましたから、

そちらのほうがあるいは古い文献資料などを所蔵されているかもしれない。実際、先ほどの大国さんが今も関わっておられる深江なんかですと、深江生活文化資料館という地域資料館がございますが、こちらなどは東灘区の深江財産区が運営されて、地域の史料の収集もされています。あるいは、古文書が所蔵されているということでいきますと、東灘区に北畑というところがありまして、そちらも財産区として近世文書を保管されているという情報がありましたので、財産区を調査対象にしてみたらどうかということで始めました。

調査に当たって、各財産区に直接関わっているセクションが神戸市役所の中の管財課というところだったのですが、そちらと私たちとの間を神戸市文書館が取り持っていて財産区調査事業を始めることができました。そういった調査活動が最終的には、灘区との間で進めることになった、神戸大学・灘区チャレンジ事業助成というものに結びついていったことになろうかと思います。

次に、尼崎市域に富松城跡という戦国期の城跡がありまして、地元の方々を中心に保全活動が進められておりましたが、その活動への連携協力が当初の地域連携センターのパイロット的な部分における重要な活動事業という形で進められました。具体的には、バーチャルミュージアムというものを立ち上げられて、当時もはや情報発信のツールとして大きな意義をもっていたWeb上において公開されたわけですが、すごい建物としての設計といった部分も含めたいへんリアルなものが当時作られまして、この展示室に入ったらどうい展示が見られるとか、これは現在も閲覧できますので、ぜひご覧いただければと思います(<http://www.tomatsujyou.com/>) が、その富松バーチャルミュージアムの歴史コンテンツ作りの部分で、担当は私ではありませんでしたが、地域連携センターとして関わらせていただきました。

さらには、これも尼崎市との連携事業ですが、旧城下町地区に中在家町というところがございますが、その中在家町に関する古文書が尼崎市立地域研究資料館(当時)に持ち込まれたこと

がきっかけで、震災以来尼崎の古文書をずっと読んでこられたボランティアのグループに史料の解読を依頼され、その活動を通して中在家町を絵図で復元されましたが、それをデジタルデータ化していくという部分に地域連携センターが協力をするという形の関わりをパイロット的に行ったということでございます。

こうしたパイロット的事業の展開が当初ありまして、おおむね1年目が過ぎていったところですが、もちろん、パイロット的とはいってもこれら事業はその後も続く前提ではあったのですが、その後もさらに、これが第2の部分になりますが、例えば地域連携協議会の際などにいろいろな方とつながりができまして、地元でこういうことがあるので地域連携センターにぜひ協力していただきたいというような話をいただくようになってきました。

その一つが、この神戸市北区淡河における連携事業ということで、センターが立ち上がった翌年の2003年度から始められた事業です。神戸市と神戸大学、あと淡河の地域では淡河自治協議会、こちらの三者の連携の形になっていまして、ほぼ10年間の活動でしたが、半年に1度の淡河歴史セミナーでありますとか、あるいは淡河にはかつて下田勉さんという郷土史家がおられました、その方が収集された資料の調査をさせていただいたりもしました。あるいは、淡河本町の区有文書の中に羽柴秀吉が発給をした天正年間の制札の現物が2枚ありました。そちらの調査をし、研究報告書を発行しました。さらにその成果の活用も模索しましたが、制札の現物は貴重なものなのでなかなか動かせないのですけれども、解説パネルを作って淡河にある道の駅に展示をさせていただいたり、パンフレットを作成して淡河全体へ全戸配布させていただいたり、あるいはのりパネに原寸大写真を貼っただけの非常に簡単なものですが、制札のレプリカを作って、それを持って行って淡河の中学校で出前授業をしたりといった活動をいたしました。当初、非常に活発に活動が進みましたが、残念ながら2013年に終わってしま

いました。こういう活動が立ち上げ後の関係から生じたということです。

ほかに、今でもずっと続いている事業ですが朝来市ですね。これも、2003年から続いている事業で、神戸大学側の担当者も何人も変わってきてはいますが、現在は今日司会をされている井上舞さんが中心となって、現在でもなおお発に活動をされています。

第3に、そうこうしていますと、冒頭に奥村先生からお話がありましたが、2003年に文学部地域連携センターができた後になりますけれども、各学部で独自に動きつつあった地域連携事業全体を統括する地域連携推進室を大学が設置されました。それが2003年4月だそうですが、その後、地域連携推進室ができたことによって、兵庫県内を中心に自治体との包括協定を結ぶというケースが増えていきました。人文学研究科など各部署単位で結ぶケースもあります。こうした協定の締結は、特にこの地域連携センターの活動の中で事業が深まる中で結ばれたということも結構多いのかなと思っています。このあたりは、地域連携推進室のホームページを見ていただければ、今現在大学がどのような包括協定を結んでいるかというのが図で示されています。

この人文学研究科地域連携センターが関わったもので言いますと、神戸市灘区が挙げられます。これは大学全体ではなく文学部との締結という形でしたでしょうか。2004年に最初結んでおります。神戸市の中の行政区と大学とかこうした協定を結ぶというのは日本初なんだそうですね。それぐらい画期的な協定を結んでおります。さらに小野市、あるいは朝来市と立て続けに協定を結んでいき、加西市、丹波市とも協定が結ばれています。丹波市は人文学研究科との協定ですが、いずれにしてもこのように協定が結ばれることによって、連携事業が強固になっていくという側面がありました。

その一つの事例として灘区との連携事業がありますが、灘区との間では特に2005年度から神戸大学・灘区チャレンジ事業助成というのが始ま

ります。この助成事業が始まった際に地域連携センターも手を挙げまして、2005年度には「篠原の昔と今」というテーマが採択されました。神戸大学のすぐそばの神戸市灘区篠原地区に関わる古文書の調査を以前から財産区調査などを含めて行ってきておりましたので、その成果を公開するという大きな意味も込めたテーマ設定でした。翌年の2006年度には、「水道筋周辺地域のむかし」というテーマが採択されました。水道筋といいますと灘区にある今は商店街になっている通りですが、昔は西宮のほうから引いてきている水道管が敷設され、その上を道路にしたというものです。灘区域ではその道路を中心に戦前から商店街ができていったわけですが、その水道筋を中心とした地域の江戸時代を含めた歴史というものを読み物の形でまとめたのが『水道筋周辺地域のむかし』という冊子です。それが2006年度のことでした。その後、少し間を置いて2011年度、2012年度には、灘区の北方六甲山地内にあります摩耶山切利天上寺やそこへ向かう古道の歴史をまとめる事業が採択されています。

別の事例ですと、これは私の担当ではありませんが、小野市や加西市が挙げられます。両市との連携事業は本来別々の事業なんですけれども、共通する部分もあるのでここでは一つにまとめさせてもらっています。小野市では、小野市立好古館による地域特別展への協力を中心に、「地域調べ学習」というまことに興味深い活動にセンターとして参加させていただいております。この写真ですけれども、小学生や中学生に夏休みを利用して地域の字単位の歴史でありますとか、地域内の小字や道、用水、伝説などさまざまなことを子供たちに1日かけて調べてもらい、それを壁新聞のようにまとめてもらったものを小野好古館で地域特別展の一部として展示をするということを何年かされました。そこへの協力をしました。

また、後には小野市から加西市のほうに事業の中心軸がシフトしますが、小野市から加西市にかけての一体を指す青野原というところにかつて第一次世界大戦後に中国大陸で捕虜となったオース

トリアやドイツの兵を収容する俘虜収容所がありました。そちらの関係資料の調査や、あるいは、そこから出てきたものをさまざまな形で活用していきました。たとえば展示会でありますとか、あるいは、オーストリアとかドイツといったクラシック音楽のふるさとともにいうべき国々の収容者が多かったものですから、俘虜によってオーケストラが結成され、彼らが地元の人向けに開催した演奏会の曲目の再現演奏会をしたりという活動を行いました。

それから、加西市の場合、^{うずらの}鶴野飛行場という戦前に作られていた海軍の飛行場跡地が残っていて、その関係の歴史遺産の基礎調査ということが2008年ぐらいから始まり、これは現在もまだいろいろな形で続いているということです。

協定に基づく成果はそういった形での発展をしてきております。協定を結んだ自治体との具体的な事業について紹介は時間の都合で省略せざるをえませんが、朝来市、加西市、丹波市などの自治体においてさまざまな形での事業が展開してきております。

それから第4に、この前期の一つの特色としましては、1年目は文科省から大学改革資金がつかことで活動が進められたのですが、2年目からは活動するための資金というものはほぼないという状況になって、大学の持ち出しのような事業になっておりました。これでは大変だなということになっていたのですが、その後、文科省をはじめとしていろいろ機関から公募される競争的資金を獲得して事業を展開するという、そういう形にシフトしていくのがこの2004年ぐらいからの話になってきます。

事業としては、つぎのような①から⑥が挙げられます。

- ① 現代的教育ニーズ取組支援プログラム（通称、現代GP）「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダー養成」事業（2004～2006年度）
- ② 魅力ある大学院教育イニシアティブ（通称、イニシア）「国際交流と地域連携を結合した

人文学教育」事業（2005～2006年度）

- ③ 資質の高い教員養成推進プログラム（通称、教員GP）「地域文化を担う地歴科高校教員の要請」（2006～2007年度）
- ④ 大学コンソーシアムひょうご神戸社会連携助成（通称、大学コンソ）「水害で水損した歴史資料の保全・修復ができるボランティアの養成事業」（2007～2008年度）
- ⑤ 大学院教育改革支援プログラム（通称、院プロ）「古典力と対話力を核とした人文学教育」（2008～2010年度）
- ⑥ 特別研究プロジェクト（通称、特別研究）「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」（2010～2012年度）

大体2年間から3年間くらいの事業を毎年のように申請をし、それができる限り途切れることがないように進めていく。そういう形で前期は展開していったという、そういう印象があります。

それぞれ関連し合っているところがあったり、連携先が全く今までないところだった高校との連携が組まれたり、また②なんかですと、国際交流ということが謳われますので、地域連携センターというよりは新たに海港都市研究センターというのを立ち上げて、そちらとの協力関係みたいな形の関わり方もありました。

それぞれの事業は別々の特色がありますので、時間もないなか細かくはお話はできませんが、いずれにしる、前期はこういうようなさまざまな事業を展開して、最終的にはそれらが学校教育、社会教育のプログラムづくりみたいな側面が強くなりましたので、大学の中でのカリキュラムでありますとか、一般市民向けの講座みたいなものをつくるというような形に帰結していきました。特に⑥の特別研究プロジェクトなんかですと、市民向け公開講座として「まちづくり地域歴史遺産活用講座」というものを設けてまして。これは現在も続いておりましたが、プロジェクトの期間中は試行という形で進められ、その後はレギュラー化して進

めていっております。こういうものがつくられたりした時期です。今日の地域連携センターの活動の基礎の部分が期に生み出されてきたというのかなと思います。その分、事業といいましょうか、成すべきこともいろいろ増えてきた段階でもありました。

さらに第5に、先ほども少し触れましたが、自治体史編さんへの関わりは当初から4つの柱の一つとしてもあげられていたわけですが、特に、地域連携センターができる以前から既に関係がありました『播磨新宮町史』でありますとか、『香寺町史』といった自治体史へ、地域連携センターとしても深く関わっていくということにもなりました。さらに、『三田市史』への関わりでありますとか、『新修神戸市史』中世編に淡河地区で行った成果の一部が反映されていくであるとか、また全く新たな地域として福井県ですが、今はもう越前町に合併ということになりましたが旧織田(おた)町の『越前織田町史』への共同研究契約なんかがなされるでありますとか、そういう形で自治体史編さんへの関わりがこの時期にも少しずつ増えていきました。

最後第6に、成果公開の場としての事業報告書ということで、これは初年度から毎年事業報告書というものをつくってきておりました。純粋にそれぞれの事業の報告でありますから読み物としては限界があるわけですが、その事業報告書の中に何年目からちょっとした論文のようなものとか、あるいは資料紹介のようなものも載せるようになってきました。いわば、事業を進める中で得てきた成果みたいなものを発表する場に事業報告書がなりつつあったということなんです。そういったことがこの後、後半のほうでお話をする『LINK』という雑誌に帰結していくということになります。

ほかにもこの前期には三田市や、朝来市、小野市などで、個別事業ごとの報告書だとか、史料目録だとか、そういったものがたくさん発行されております。それぞれ本当はここで一つ一つあげればよかったのかもしれませんが時間の都合で省略

します。一つの参考になるのは、『「地域歴史遺産」の可能性』という本のなかで坂江渉さんから紹介していただいておりますのでそちらをご参照いただければいいのかなと思います。

さらに、前期には一般向けの読み物が発行されました。先ほど紹介した『篠原の昔と今』とか、あるいは『水道橋周辺地域のむかし』などですが、これは試みとしての部分もあったわけですが、これが一つのきっかけになって、その後、例えば丹波市でブックレット型の読み物が発行されたりしました。これは先ほど徳原さんからご紹介いただいたところです。

さらに、図録形式の部分でいきますと神戸市中央区の西端海辺付近に位置していました脇浜というところに長浜家文書という文書群が伝わっておりまして、そちらの紹介を兼ねて、地元で展示をした際に図録を発行しています。図録という形での発行物もやはり『篠原の昔と今』というものをつくったことをきっかけにして、専門的研究者であっても展示という部分では素人に近いわたしたち地域連携センターでも作ることができるんだということに認識したといえるのかなと思っています。

さらに、これはもう出版物として神戸新聞総合出版センターから発行されました『捕虜としての姫路・青野原を生きる』というブックレットのような冊子が発行されています。こうした自費出版ではない形での出版物が発行されるようになった。そういうこともこの前期の間に進んできたということになるかと思います。

3 地域連携センターの後期／20年～『地域歴史遺産と現代社会』の時代

こうした前期の段階の集大成が『「地域歴史遺産」の可能性』ということになるわけです。それ以前の状況を受けまして、その後、『「地域歴史遺産」の可能性』でいうところのこれからの10年というのがまさにいまやってくるわけです。いまここで「後期／20年」とする時期も実はまだ終わりはみえてないのかもしれませんが、一応

の帰結が『地域歴史遺産と現代社会』という図書ではないかと私は勝手に思っております。

後期といっても、もちろん前期からの連続性はあるわけですが、この大学協定を結んだ自治体との連携関係は、その後もむしろ協定を結んだことによって当然安定化して、しかも多角化していくということです。一方、それまでほとんど関係性のなかった三木市というところとの協定が結ばれるのが2013年でありまして、それから神戸市も意外と協定という形では全体としては結んでいなかったのが2013年には結ばれています。意外なところでは大分県中津市。これは神戸大学の前身の神戸商業大学の初代総長が水島鍬也という人、これが中津市出身だということで、その縁にして生み出された一つの協定ですが、ちょうど中津市のほうでは、中津市歴史博物館が建設されるというタイミングに重なったこともあって専門的な立場からのアドバイスをするような形で協力がなされたりしたということです。

西脇市とも2015年には人文学研究科とが協定を結んでおります。あるいは、先ほど大国さんからのお話もありましたが、神戸新聞社とも2014年に協定を結んでいるように、自治体とは違うところとの協定なども結ばれるようになってきております。東北大学人間文化研究機構との間での協定が2017年、最近ではサンテレビとも協定が結ばれてきているということで、いろいろ協定締結先も多角化してきております。そういう協定を結んで、さらに事業を安定化していく流れというのは、その後10年間続いてきているということになります。

次に、新たな自治体史編さんへの参画という点ですが、その特色としましては、自治体史編さん、もしくは編纂事業を行おうとしている自治体との連携事業専従の研究員が、特命教員のような形で採用されるようになってきました。実質的には非常勤教員のようなものとはいえ、一応特命教員の形で大学の中に配置をし、その編さん事業全体に恒常的な形で専門知識を導入するという形での参画をします。現在、私自身がまさにそれでして、

現在『新三木市史』編さん事業を中心とする三木市との連携事業の担当という形で、その特命教員という形で今は関わらせていただいているということになります。三木市史編さん事務局の一員のような扱いを受けておりますので、三木市内でも比較的動きやすい状況ではありますけれども、これも以前から進められてきた三木市での連携事業が発展をして、こういう市史編さん事業が企画されるに至り、そこに大学も積極的に関わっているという、そういう事例かなと思います。

この三木市史をモデルにするような格好だったと思うのですが、「丹波篠山市史」のほうでもそういう形で今現在動いてきております。これも前提としましては、2012年くらいから篠山市内における図書館での地域資料整理サポーターという古文書整理ボランティアを育成する事業を進めていった結果、市史を企画されたということになったのかなと想像します。

さらに、「明石市史」。これは、ほぼ後期の段階から始まり、進められつつある事業でもあります。何年か前は私もこの担当をしていたわけですが、今は交代しております。こういうような自治体史の編さんというものも、センターのメンバーが個別の執筆者として関わるというよりは、市史のプロジェクト全体に地域連携センターとして関わっているということになるかと思えます。

次に、ずっとこれまで進められてきた市民との協業というものが、さらに20年のうちの後半の10年も進められてきているのかなという印象を抱いていますが、その典型的な例がこの朝来市における活動、とりわけ生野書院での活動かなと思います。これは、今日司会をされている井上舞さんが2011年から担当されるようになって、より市民との協業という部分が深まっているのではないかなと私なんかは見ております。

あるいは、私が今関わっている三木市でありますとか丹波市、丹波篠山市とか、そういったところでもボランティアとの協業というものを積極的に進めてきております。三木市なんかですと、本

当にこれはありがたいのですが、ボランティアの方に地域資料の整理だとか翻刻作業をしていただいたり、史料修復家の尾立和則さんのご指導のもと、資料の修復などを担当していただくようになったボランティアの方がおられたり、データの入力だけをしていただく方だとか、写真撮影だけをずっとやっていただく方など、さまざまな分野にボランティアの方が関わっていただいています。ボランティアさんなしではもはやこの「三木市史」の場合は進められないと断言してもいいくらい、非常にありがたい状況が続いております。

このように、ボランティアと協業するのが当たり前のようになってきているような事業も出てきたのが、この後期の特徴なのかなと思っております。

『地域歴史遺産と現代社会』（神戸大学出版会、2018年）という本ができる一つのきっかけにもなったのですが、さまざまなプロジェクト、とりわけ大型のプロジェクトというものが後期には生み出されてきました。その一つが科研なのですが、科研ですから、これは地域連携センターそのものの活動というよりは、厳密には個人として申請した結果採択された科研へ、センターとして支援、協力するという、そういう位置づけにはなるのですが、実質的なところでは、この科研の部分がなければ後期の地域連携センターも回っていかなかったんじゃないかなということです。

以前は科研S、現在は特別推進研究という科研のなかでも予算規模がとりわけ大きなプロジェクトが今現在進められておりますけれども、これらのテーマはそれぞれ「大規模自然災害」、「災害文化形成」、「災害列島」というように「災害」をキーワードにして研究の方向性がそれぞれの科研に組まれてきました。地域連携センターもその部分は当然柱の一つでもありましたし、メンバーの重なりもあって、形の上ではあくまで研究者個人が行う研究としての大規模科研に、センターとしても深く関わってきたという格好になります。

さらに、2番目のところで、地（知）の拠点大学による地方創生推進事業、通称COC+というのが2015年から2019年までの間進められ

ました。現在も講義プログラムのような形で残っておりますが、この『地域歴史遺産と現代社会』という本は、このCOC+という事業の中で、講義プログラムにおけるテキストを作るという形でできていった本なわけです。これに関しては、私なども終わりの2年ぐらい少し担当したりもしました。このCOC+という事業の中では、人材育成の部分、とりわけ地域課題を解決できる人材育成し、地域に送りだそうということを最終目標に掲げていました。その部分を踏まえた地域志向科目の開発・整備というのがこの事業期間4年の中で目指されてきて、現在も講義プログラムに結実して進められているという部分でございます。

ほかにも、協定も結びましたが、神戸大学と東北大学と人間文化機構による三者が連携したような形で進められている、「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」というプロジェクトがございます。これもやはり災害を踏まえてということですが、多発する災害への対応をこういった三者の連携をベースに想定し、神戸大学はその西における基点に位置づけられ、その拠点になっているのが地域連携センターにはほかならないわけです。

あと、科研に近いですけれども神戸発アーバンイノベーション神戸というものをここ一、二年は進めてきております。時間の都合で具体的な活動内容は省略せざるをえませんが、その活動の拠点にやはり地域連携センターがなっているということになります。

また、2009年には『LINK【地域・大学・文化】』という年刊の雑誌を創刊したわけですが、先ほど申しましたように、事業報告書で論考や史料紹介などを掲載しても、なかなか一般の人の目に触れられる機会が少ないのかなと思うわけですが、そういう機運があって、センターの活動の成果をもう少し読み物のような形で進められないかということで生み出されたのが、『LINK【地域・大学・文化】』という雑誌でございます。これも現在12号、今現在13号の発行に向けて大急ぎで編集作業を進めております。

あるいは、個別事業の成果物もその後ここには書き切れないくらい多く発行されてきておりますが、『観聞記』と言われる資料の紹介を行っている事業がありまして、そちらでも成果物としての冊子が作られたり、明石市との連携事業の一つに、明石市立文化博物館における展示事業がありまして、2013年以来ほぼ毎年「明石藩の世界」と題した展示会が開催されてきておりますが、そちらへの協力の中で作られる展示図録の作成についても地域連携センターが積極的に関わってきました。

ほかにも猪名川町における多田院御家人の史料調査研究の中でいくつかの冊子が発行されましたし、最近では、もと朝日放送のカメラマンだった故・大木本美通さんという方が撮られていた阪神・淡路大震災時の貴重な写真を収載した『阪神・淡路大震災を撮る』という写真集も制作されました。

最後に、やはり触れておきたいのは、地域連携センターの総括的な成果物としての『「地域歴史遺産」の可能性』と『地域歴史遺産と現代社会』の2冊は、私たちの活動の一端を一般の方にも広く知っていただくということを目標に掲げて発行されたものにほかなりません。

むすびにかえて～これからの地域連携活動への課題

最後に、むすびにかえてということなんですけれども。あまり私自身この20年間神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの諸事業に携わってきておりますけれども、当初の坂江渉さんのような立場に立って本センターの事業全体を見渡すことよりは、むしろ現場で地道に活動することに専念してきた、そういった人間かなと思います。そういった意味でも、全体的な立場から本センターの課題というものを語るには、実はふさわしくない人間かもしれないと感じています。しかし、やはりそれぞれの事業担当者ごとに課題というのは存在してまして、例えば、地域住民と大学の協働の場というものがやはりきちんと確立される必要があるというような課題がどの事業に

も必ずのようにみられたり、さまざまな活動を行う「場」そのものの構築であったり、地域住民とともに構築された新たなコミュニティが、末永く活動を続けるためにも新陳代謝が行われるように敷居の低い入り口づくりをすることであるとか、そういった課題を挙げることができます。

さらに、私の場合で言いますと、現在三木市との連携事業を進めておりまして、資料調査も市内あちこちで行いますので、把握する文書群の件数が非常に増えております。とにかく捜せば捜すほど史料群は見いだせます。しかし、そうはいっても、例えば江戸時代の古文書をお持ちと思われるかつて庄屋などの村役人を務められたような方の子孫のお宅が、現在分からなくなって、結果文書群の多さの割に江戸時代以前の文献史料が思ったほど多く見いだせていないという、外部の皆さんにとっては些細に思われるかもしれませんが、私にとってはまことに大きな課題があります。三木市の場合、特にゴルフ場開発が非常に多いものによって、家を建て替えたり、あるいは、地区の公民館が建て替えられたりというような事態がここ数十年の間に急速にすすみました。そういった建て替え時に、それまでの古い建物の中で静かに保管されてきた古い書類なんか、不要なものとして処分されるというケースが多くあったようです。今後はそういうことが地域社会の中でできるかぎり起きないようにするには、日常的に古文書リテラシーのようなものが一般的に普及させられないかなというようなことを私自身の課題としております。

地域連携センターとしての全体的な課題として浮かび上がるものがあるとするれば、こういうことかなということでもいくつかあげさせてもらっていますが、まず第一に、事業を持続させることの難しさというのがありまして、資金面でありますとか、担い手の問題、それらは非常に切実な課題として私たちの眼前に迫っていると感じています。とりわけ担い手の問題はなかなか難しく、センターが立ち上がった当初は、神戸大学にマンパ

ワーの供給源として地域から期待されていた部分があったと思うのですが、最近は学生自体が少なくなり、個々人もいろいろと忙しくなっているという状況の中で、なかなかセンターの事業へお手伝いいただくことも心苦しいような状況になってきたりします。

あと、大学に属する者として本務としての事業や本来やるべき研究というものの折り合いですね。担い手、地域社会、そして大学そのものの「やる気」とか情熱、そういったものがどれぐらい維持できるのかなといった部分もやはり課題かなと思っております。

地域社会を取り巻く危機というものはこの10年間さらに深まっているわけですね。災害が多発し、人口も減少して。特にここ数年は新型コロナ禍という状況の中で、それまでの部分とこれからの部分の間に大きな分断が生じてきているのではないかと。特に地域では、民俗行事などがこのコロナ禍のなかで中止になるケースが非常に多くなっています。ひとたび中止になったことによる影響がその後おきないかという懸念、きちんと復活すればいいんですが、1～2年実施されなかったことによって、受け継がれなくなるような可能性もないわけではないと思います。そういう部分の危機というものはより一層深刻さが増していると考えています。

一方で、淡い期待も抱いていまして、いわゆる平成の大合併の影響がここ10年間の間に大分落ち着いてきたのかなと思うようなこともあります。自治体に余裕が生まれてきているのではないかと。ということなんですが、例えば、ある自治体の担当者が最近ですけれども私のもとに訪ねて来られて、私がセンターの立ち上がり当初取り組んだ財産区調査について、当時の報告書か何かを見られて、その財産区調査の経験の話を聞きたいというわけです。私たちが財産区調査を行ったのは、当時自治体が大変だから、私たちが代わりに大学として協力するという形で進めてきたものを、逆に自治体がいまそれを行おうとしているんだなと感じたんですね。だからそういう意味では、

多少自治体にも余裕が出てこられたのかなと思いついて、そういう意味での期待ということです。

さらに、いま地域社会に都会から若い人達が移住するというケースが増えつつあるやにきております。いわゆるIターンという現象ですが、地域社会において高齢化や過疎化によって人が少なくなっていく中でそういった人たちが少しずつ地域の中で増えてきて、そうした人たちを中心に地域のまちおこし・里づくりみたいなものが取り組まれているという状況も聞きます。そういった部分がひょっとしたら期待できる部分かなと思っております。

最後はちょっと雑駁な話になってしまいましたが、私の話としては以上になります。どうもありがとうございました。

全体討論

司会 市沢 哲
神戸大学大学院人文学研究科

○司会（井上舞） 時間になりましたので、これより全体討論に移りたいと思います。討論の司会については本学の市沢先生にお願いしたいと思います。それでは、よろしくお願いします。

○司会（市沢哲） よろしく申し上げます。報告者の皆さん、どうもありがとうございました。大国さんからは本来こちらがやらなきゃいけないことを代わりにやってくださったみたいところがあって、20年間の協議会を通じてそこでの成果と課題について整理していただきましたし。木村さんは協議会ではなくて20年間の活動を振り返るということで、メンバーとしての関りも含めて御報告いただいたと思います。それから、徳原さんと大槻さんからは、地域の中での活動の現状を踏まえながらその中で大学との連携というのはどういう成果と課題をもっているかという、お話をいただけたかと思っております。どうもありがとうございました。

討論ですが、今のところ質問があがってきてい

ないみたいなので、皆さんから意見を出していただきたいと思うのですが。今日は4人の方々の発表の中で、これまでを振り返る形でいろいろな活動について御紹介がありましたし、徳原さんと大槻さんからは現在進行形の活動も御紹介があったと思います。

連携協議会の常であるのですけれども、これらの活動について何か質問や確認をしたいことがあれば。今日のメインになるのは、成果と課題の問題なのかなと思います。4者4様に成果と課題というを出していただいたかと思うのですけれども、優先的に議論するという序列がなかなかつけない項目ばかりですので、到達点と課題についても含めて御質問があればお願いしたいと思います。センターの関係者の方も、いかがでしょうか。○古市晃（神戸大学大学院人文学研究科） 神戸大学の古市です。それぞれに大変興味深い御報告で、事例も含めて大変勉強になりました。私もその活動の10年くらいに関わっているのですけれども、自分自身でも忘れていたか関わりが薄いところもあって、いろいろ勉強になったのですが。

お伺いしたいのは、大槻先生のお話についてです。中学生に対する記憶の継承ということをおっしゃられたと思うのですが、確かに私たちも大学で1年生向けの授業なんかをやっていますと祖父母と過ごす時間というのが私たちの頃と比べて明らかに少ない。私は1970年生まれですけれども、一応まだ祖父母と同居していましたので、祖父母からいろいろと聞くことができました。けれどもそういう人の率も明らかに減っているし、非常に難しいなということで、その取り組みが大変おもしろいなと思いました。

そのときに、大槻先生の御経験ということで、中学生にそういうことを語るというのがどういう場でなされているのかということと、中学生の反応が個々いろいろあるのでしょうかけれども、どういう反応なのかということをお経験から教えていただければと思います。以上です。

○大槻守 今、お尋ねいただきました大槻です。

中学生と話す機会といいますのは、今2つ設け

ております。

1つは、出前授業をしております。これは中学校が積極的に迎え入れていただきまして、地域の歴史を知りたいということをおっしゃって。会員からその話をしようじゃないかということになりまして。内容は一つは、自分たちが体験した戦争中の話。それから、戦後の暮らしの変化といったようなことを中心に授業をいたしました。

もう一つは、今度は子供たちが実際に地域に行って地域調べをするということになりまして、その案内をしてほしいと言われてたわけです。それで、子供たちが地域へ来ましたときに迎え入れたそれぞれの地域では、公民館とかあるいは神社などに集めまして、そこで子供たちに話をし、それから地域の中を歩いて一緒に回ると。ここでこういうものがありましたよ。こうだったよ。私が子供の頃はこんなだったよと。この山も川もこんな状態だったと。あるいは、ここで川遊びをしたんだとかいうような話をしてもらいました。

子供たちとの機会というのはなかなかふだんはありませんので、子供たちとの機会をそういう形で作っていただいて。これをできたら例年やりたいなと、こう思っております。

1年生にするのと、それから2年生と2回やったのですけれども。反応としては2年生のほうがやはりよろしいですね。1年生では、話したことに対して反応がもう一つ弱い。しかし、子供たちはいつもで地域を回っていつも通っているんだけど、こんなところは気が付かなかったということをおっしゃるわけですね。初めて教えてもらったということをおっしゃるね。

戦後のことについても、全く今の生活と違うなというふうにお受け取りますね。戦後は、例えば自分たちで山へ行ってきた木を取ってきてそれを燃料にして御飯を炊いたのだとか。あるいは、自分たちで作ったイモを、ふかして食べたんだとかということで、食べるものやあるいは生活の中で大人たちが自分で、子供も含めて自分で働いてそして生活していったんだなということが分かったと。だから、子供たちが、「私たちとは違ってと

ても生き生きをした生活だったのではないですか。」という意味の反応があったりしておもしろいと思いましたね。そんな大変な生活だったら困るなどというような違う意味の興味関心をもってくれたという面もありました。子供たちがあちこち回れたと、話を聞けたということが非常に良かったという反応は聞いております。以上です。

○古市 ありがとうございます。多分、地域の住民もすごく多様化しているというか、香寺町ではどうか分かりませんが、関西のほうだと結構中学生なんかでも外国人の方の姉弟の方がおられるとか、いろいろな方が入ってこれると思うのですけれども。そういう多様化しているところでも、その場が授業の中で確保されているというのは非常におもしろいなど。大国さんの言葉で言うとお国自慢にならないというか。ずっと住んでいるからそうなるんだという話じゃなくて、その地域の人だから地域のことをやるんだという。いろいろな可能性があるのかなというふうに思いました。

それから、今のお話だと歴史と地域史の「史」が「誌」ですよ。生活史というか、人間の生活の総体みたいなところに志向するような話なのかな。我々も歴史をやっていますと地域の中の歴史を語りたい、古文書を語りたいとか、そういうふうになってしまうんですけれども。今のお話で、直接現場に案内するということが大いのだと思いますけれども、その地域の人々の生活の総体を伝えるということが大変興味深いなと思って伺いました。どうもありがとうございます。

○司会（市沢） ありがとうございます。司会が口を差し挟んで何なのですけれども。大槻先生には、以前、大学の地域歴史遺産の授業に登壇いただいたことが何回もあったのですけれども。私も一緒に授業をさせていただいたのですが、そのときに戦争が終わった日の話というのを。要するに、終戦を自分がどのように知ったか。そのとき、自分の身の回りや家族はどうだったかというお話をしてくださったことがあって。

そういうのを聞くと、若い人たちというのは戦

争が終わった日といったら、皇居に向かってみんなが土下座して泣いているという、そういうのをステレオタイプ的に思い出すのでしょうかけれども。そういうのとは違うそれぞれの人たちがその終戦をどういうふうに取り受けたのかというのを、より本当の姿としてお話をさせていただくというところで、学生たちはそういうことにすごく大きくショックを受けたというか、やはりそうだったのかとかいう感想があったというのを、今のやりとりを聞いていて思い出したりしました。

ですから、身の回りの語りかもしれませんけど、それはやはり結構歴史観とか、歴史に対する考え方について揺さぶられるというのかな。考え直す大きな機会になるのではないかな。そういう御活動なのではないかなと聞いていて思った次第です。ありがとうございます。

振り返るということ言えば、例えば木村さんの御報告によく名前が出ていた佐々木さん、センターや連携活動の20年というのを振り返ってみていかがですか。

○佐々木和子（神戸大学大学院人文学研究科）

私は20年という話よりもずっと今大槻先生のお話なども聞いていまして、この地域の歴史の話をするときに生活の話を知るという話が出てきましたけど。

一つ、不思議だなと思っているのに、女の人あまり出てこないんですよ。その活動の主体に。そういう言い方をしたら申し訳ないのですけれども。私なんか別に女性だからというわけではないんですけれども、なぜか地域歴史遺産、今日の協議会のようなときも、今では少しずつ増えてきていますけれども女性の参加というか、女性が参加して何かというのが少ないなという気がずっとしてきました。

三木でやっていらっしゃるようなことでも若いお母さんたちというか、この頃、皆さん、それこそ大槻先生がおっしゃったように再雇用で働かれている方。あるいは、お母さんたちも働かれるようになったからかもしれませんけど、何かそういうつながりというか興味、子供たちに歴史的な関心

を持っていただくようなことでお母さんたちが入るような活動というのはあるのかなというのを少し。別にどなたにということではないのですが、活動されている方にお伺いしてみたいなと思います。

○司会（市沢） ありがとうございます。なかなかおもしろい、興味深い質問じゃないかなと思うのですが。

当然、女性には女性の、男性とは違う生活のあり方というのがあるわけで。例えば、生活経験の分野ということで言えば、女性の立場からというのは当然あるのだろうと思うのですが。報告者の方以外でも、今のこの佐々木さんの問いかけについて何か御意見があればお願いしたいのですが、いかがでしょうか。

もちろん、女性で活動の主体になっておられる方もいらっしゃると思うので、そのような方からの発言も歓迎したいと思いますけど。

○奥村弘 私の経験で1つだけ。

○司会（市沢） お願いします。

○奥村 小野市の考古館の活動のときに、女性の話が出てきたのですけれども。なぜかというと、結構地域調査のときにお母さん方が子供たちと参加されていました。一番印象的だったのは、自分たちは外から嫁いできたということで、かなり若い人の中でも、もともと地域にお住まいでなくて、旦那さんからも地域の歴史を聞かせていただくことはあまりなくて、初めて子供と一緒に聞いたということを何回か聞いたことがあって。

そういう意味では、そういう人たちに私たちが十分対応できているかどうかということは、一つの課題かなというふうに思ったことがあります。以上です。

○司会（市沢） ありがとうございます。確かに私も同じ場所にいたんじゃないかなと思います。今奥村先生が言われた同じような経験をしたと思います。

○大槻 すみません、いいですか。

○司会（市沢） お願いします。

○大槻 女性の参加の件なのですが、実はこれ

は聞く方の意識の問題があるかもしれないなと思っております。

私どもの会員自身が男性ばかり。女性会員は今のところ一人しかおりません。私ども、いろいろな調査をしておりますが、聞き取り調査や村に入って聞くのですが、どうしても男ばかりです。で女の人に聞くということはあまりしないように思うのですね。聞いてもしようがないなと思うのかも分かりませんが、聞く側の意識の問題もあるかと。

私どもも、積極的に女性の方に聞くような座談会を開いたこともあります。でも、それは今回の調査、ここ数年続けておる中でも聞き取りをあまりしていません。残念ながら。今年は住まいのことをしましたので、もう少し女の方の話が全般的に聞けるかなと思って期待をしたのですが。残念ながら、今年もそれほど女性に聞いたと、家の中でどう暮らしておったのか、家がどんなふうになったのかということ聞いてもらおうかと思ったのですが、それほど皆さんが積極的にそれを聞かずに、自分はこうだったという男の人が覚えておることをどうしても話して、それが調査の結果に出てきたようにしております。

そういう意味では、女性の参加は女性の側もあるでしょうが、男性側にもあるのではないかなと、こう思ったりしてお聞きしました。以上です。

○司会（市沢） ありがとうございます。今、大槻さんからは現状はこうだということで、これから少し考えていかないといけないところもあるということでしたが。この女性の参加とかそういった問題について、まだもし御意見があればあと一つぐらいお伺いしたいと思うのですが、いかがですかね。

○清山ひとみ（古記録の回） すみません。質問なんですけれども。こんにちは。古記録の会の清山と申します。

初歩的な質問で大変申し訳ないのですが。お話の中で地域の資料について活用していくということを登壇の先生方のお話を聞いて、活用とはどういうことを指されているのだからと素人

ながら大変興味がありまして、御質問させていただきました。

○司会（市沢）ありがとうございます。そうですね。保全と活用というふうに決まり文句のように言うのですが、その活用というのはどういうことを具体的にイメージしたらよいのかという、そういう御質問だと思うのですけれども。これは大国さん、いかがですか。

○大国正美 大国です。活用って、別に限定的な定義はないと思っています。何か資料があってそこから何か読み取るという作業もそうだし。例えば、地域にある石造物だとか、そういったものを見学するとか。はっきり言うと、そこから何か地域の特色だとか自分の関心のあることを読み取るという行為。それが活用だと思うのですけれども。例えば、古文書を活字にするみたいなことが活用というふうには私は考えていません。

○清山 ありがとうございます。

○司会（市沢）清山さん、よろしいですか。もう少し具体的にほかの方の意見も、もしあれば。

○山内順子（丹波市文化財保護審議会）すみません、山内です。少しだけお話をしてもよろしいですか。

○司会（市沢）お願いします。

○山内 女性の参加ということなのですから。氷上郷土史研究会では、まず夫婦会員、家族会員という募集の仕方しています。御夫婦で入られると会員費が割引みたいな、そういう現実的なところもあるのですけれども。どちらが最初に入られても御家族で参加されませんかというのは、一つの方法かなと思います。

それから、子育て中のお母様ということなのですから。子育て支援センターなどの依頼を受けまして、私のほうがそのお母様方、赤ちゃんを連れて来てくださっても大丈夫ですよ。少し騒いでも大丈夫ですよという前提で、興味のあるお母様方にお声をおかけしたところ、やはり1回10人ぐらいはお集まりになって。もちろん、子供さんたちが遊べる場所を提供しながら古文書のお話をしたりとかということも一、二度ですけれども

試みとしてやったことはあります。

その中で、やっぱり興味はあるけれども状況的には許されなかったけれども、こういう場であれば参加したいという若いお母様方もいらっしゃいました。必ずしも、その世代がこういうことに興味がないというわけではなくて、やはり状況的に許されないときがあるので、それをクリアしていけばそういう参加者層というのは広がっていくのかなというふうに私自身は感じています。

○司会（市沢）貴重な御意見をありがとうございました。参加しやすい形を考えなきゃいけないところもある。それは女性というだけじゃなくて、様々な形で人々が生活を営んでいるので、その生活の中で参加できる形をみんなで考えていかなきゃいけないというそういう御提言だったかなと思います。どうもありがとうございました。

これまでの協議会で全然話題にならなかったわけではないとは思いますが、やはり問題にすべき点ということでこれからの活動にも生かしていきたいなと思います。

先ほど活用とは一体何を指すのかという御質問が清山さんから出て、今大国さんからお答えをいただいたりしたのですが。非常に幅のある言葉であって、例えばまちおこしに使うとか、学習会で教材として使うとか、そういうことが多分に含有されているのだろうなと思います。

そのほか御質問があればお願いしたいのですが。個別の活動のことですね。むしろ、そちらのほうをメインで何か御質問があればお願いしたいと思うのですけれども。いかがでしょうか。

あと、残り時間が20分ぐらいということで。それでは個別の活動に関する質問とか経験のシェアというのも含めながら、20年間連携事業をやってきた総括というか、到達点と課題のほうに話を移していきたいと思うのですけれども。いかがでしょうか。

20年前の様子というのは地域連携センターのホームページに地域連携活動の報告書があって、そこに1回からずっと報告書が並んでいて。1回目のところを私も始まる前に見ていたんですけれ

ども、そのときは13人ぐらいが報告して4人ぐらいコメントするという。今では考えられないぐらいの熱量でみんなが議論している。

その中で、最後奥村先生が言われたことが思い出されたのですけど。地域は自分の地域のことにしか関心がない。自治体は住民全員に均等なサービスが行われなければいけない。大学は、自分たちの論文のことだけ考えているという。そういうことになるのは最悪なのだ。そういうことになると、地域の歴史なんていうのはすぐに死滅してしまうだろうというようなことを総括で言われていたのですけど。それが20年間活動をやっていく中でどう変わってきたのかという。全体としては、希望が持てるようなところが少しずつ増えてきているのではないかなというふうに20年間、自分の振り返りをしたのですけど。

何か御意見や御質問があればお願いしたいと思うのですけど。松下さん、どうでしょうか。長い間活動をされていると思いますけど。

○松下正和（神戸大学地域連携推進本部） どうもありがとうございます。こんにちは。

今日は、御報告、20年間にわたる長きの活動をあんなふうにまとめていただくとうごく分かりやすいなと思いました。ありがとうございます。

やはり皆さんの話も途中あったかもしれませんが、人にプロジェクトがついて、初期はそういう担当でやったということもあったかとは思いますが、一方で、いろいろなプロジェクトをやる中で自分が思わぬ方向にいったというか、プロジェクトに育てられて当初の専門以外にも活動が広がったり、実践が広がっていったというふうに自分自身が育てられるという局面も皆さんの中であったんじゃないかなと思うのですけれども。そういうのも聞いてみたいというふうに思ったのが一つです。

もう一つが、そういう意味で若い世代の方々が、どういうふうに私たちのこの地域連携活動を見ているのかなというのも個人的には聞いてみたいところです。

もうひとつが、担い手がなかなか広がらないと

いいですか、事例は増えているけれどもなかなか人も地域も限定だという話が途中あったかと思うのですけれども。そんな中でいかにいろいろな人を巻き込んでいくのかというところで。皆さんといろいろ各地のよその事例も含めて教えていただきたいなと思います。

ある意味、地域に住んでいる人だけを対象とすると広がり的に難しいのかなという。私は今、地域連携推進本部の立場ですけど、農学部なんかの活動も見ていると、篠山でのいろいろな関係、交流人口を巻き込んだ形で元の住民プラスアルファのところでもいろいろ広がっているということもありますし。そういう歴史だけに興味を持っている人だけではなくて、多様な分野というのでしょうか。歴史以外も含めて地域全体に関心を持っている人にいかに広げていくか。ある意味、歴史がワン・オブ・ゼムになると思うのですけど。そういう広げ方も今後必要になるのではないかなと個人的には考えております。

いっぱいあって申し訳ないのですけど。その辺りが気になったところでありました。ありがとうございます。

○司会（市沢） ありがとうございます。

今の課題で言えば後段のほうでしょうか。松下さんの話で言うと。担い手を広げるといったときに、地域の内外にかかわらずとか、歴史ということに限定せずという。そういう形で人々を巻き込んでいくということも必要なのではないかと御提言だったと思うのですけれども。

課題を吐き出すという感じでしゃべってもらえればと思うのですけれども。若い人という話が出たので加藤さん、どうでしょうか。

○加藤明恵（神戸大学大学院人文学研究科） 地域連携センターの加藤と申します。若い人が地域連携センターの活動をどう見てきたかということですね。どう見てきたのかなと思って自分でもちょっと考えているのですけど。

私は、学部のときからこの大学におりまして、大学院も神戸大で。本格的に地域連携センターの調査に関わるようになったのは、学部のときから

お手伝いはさせてもらっていたかと思いますが
やっぱり大学院に入ってからですね。

どう見ていたかというところですが、私は自分の研究も地域史的なことをやっているのでも研究の中でも地域のことは見てきたのですが。研究であれば自分の問題関心に基づいていろいろやっていけばいいわけですが。自治体であるとか住民の方と協力するときは何が知りたいとか、どういうことをやりたいかとかということにどれだけこちら側が提案をしていけるかとか。

実は、私が一番初めに本格的にお手伝いをさせてもらったところは、加西市の野上町というところだったのですが。住民の方とこちらでやりたいことがいまいち合わないということが最初にあった。だから、そのすり合わせをどうやってやっていくかとか。木村さんがスライドの最後のほうで問題にされていたかと思うのですが、地域の歴史文化を合理的に解釈するというスライドを木村さんが出しておられたかと思うのですが。まさにそういう問題で。担当が坂江さんだったのでかなり御苦労されていたのではないかなと思うのですが。

やはり地域に残されている資料と住民の方の思いと私たちの地域連携センター側の考えとか、きちんと科学的に地域の歴史を明らかにしましょうという考えのすり合わせをどうやっていくかというところがすごく重要な点なのかなと思うのは、若い人の意見とか、どう見ていたかというところで。今、自分が中にいると難しいのですが。一番初めに関わったときには、そのようなことを思ったという記憶があります。

○司会(市沢) ありがとうございます。今の話をお伺いして、自分が大学院生の頃はそんなことなんか、本当、ほんのちょっとも考えたことがなかったというふうに思いますので。最初から地域連携センターが横にあるとか、その中にいながら研究していくというのはそういうことなんだなというのを、今加藤さんのお話を聞いていて思った次第です。

あまり時間がないので、少し関係の自治体の方

とか、それからそうではない立場からここに参加されている方のお話もお伺いしたいなと思いますけど。あまり肩肘を張らずに自由に御発言いただければありがたいと思うのですが。いかがでしょうか。

○奥村 千種さん辺りに一言コメントがお願いできたらと思いますけど。

○司会(市沢) じゃあ、そういうリクエストがあったので、千種さん、来られてますか。今日のお話で御意見があればお願いします。

○千種浩(神戸市文化スポーツ課) 神戸市の千種です。今日は20年間を振り返ってということで、大国さんのお話とか、木村さんのお話とか非常によく分かり、20年を振り返って総括していただいて非常にありがたかったと思います。

お話をお聞きしていて、やはり私どももそうなのですが次どうしていくかと。今、多分センターもそうだと思うのですが、だんだん新しい人も入ってこられて、人材も変わってきて、当初のことがなかなかリアルには伝わりにくい。今後、どういうふうに大学も、自治体も、これまでのことを次の世代に伝えていくのかということが、これは地元でもそうだと思うのですが、地元住民の方でも今まで活動をずっと続けられる方はおられるのですが。例えば神戸でも淡河で神戸大学と一緒にやった事業がありましたけども。なかなか途中で続かなかったようなこともあります。

やはりどこも継承についての課題というのがあるのかなというところで、なかなか展望が見えないところはあるのですが。今、お話を伺ったときの感想です。簡単ですが、以上コメントにさせていただきます。

○司会(市沢) ありがとうございます。まさに、今言ったように継承の問題というのは大学のほうも、もちろんあるというか。最初、センターを作った世代というのはもう数年で退職ということになりますし。その継承の問題というのは、当然、考えていかないといけない問題だということだと思います。

その辺りも踏まえて、奥村先生、もう一回お願

いしていいですか。

○奥村 どうもすみません。ありがとうございます。20年間は結構長いというか、短かったというか、振り返って僕もいろいろと考えさせられたところがあるんですけども。

先ほどからやはり継承の問題というところで、やはりコロナの問題で、今日はこういう形でまた遠隔でやっていますけど。県内の様々な郷土史の団体であるとか歴史関係の団体の皆さんが会うことが、2年間以上できてない状態になっているんだなというふうなことを、特に思いました。

コロナがうまく縮小するか、なくなることはないと思いますけども、何とかもう一度お互いに会えるような状況を私たちも大学としても作り出すようなことを意識的に努力をしないといけないかなど。いろいろな方とそこで話をしたり、ヒントをもらったり、勇気づけられたりしながら進めていくということはとても大事なことで、それがこの2年間でできなくなっているというのをすごく感じさせられました。いろいろな意味で大学としての役割としても重要ではないかなというふうに、個人的な感想として思いました。

あと、継承という点では、木村さんが言われたことが一つ重要な点で。今、各自治体史などに関与させていただく形で特命教員という形でそこに関わらせていただいて、その仕事をすると共に、広くやっている事業を大学にも戻していただければほかの地域にもつなげていくということで、動いていただいているところが多いのですけれども。さっき出てきたような、県内の全体の相談に乗ったりとか、地域の団体の方々が集まるような場所を積極的に自主的につくったりとかということを専任でやれるような体制が今大学の地域連携センターの中でできていないという状況がございます。

木村さんもこれも言われましたけど、ずっと一種継続的なお金じゃないところで支えているところもあってしんどいところはあるのですけれど。何らかの形でやはり全体を見ていくことがどうやったら可能になるかということ、皆さんとも

話をしながら考えていかないといけないのかなということを強く思っています。

今度兵庫県で兵庫津ミュージアムというのができることになってはいますが、その機能の一つに県内の様々な地域の歴史文化の交流機能を持つということをやっておられますので、そういうところもうまく連携しながら使っていくということも大事かなと思います。神戸市さんは、文書館の機能を拡張するということをお聞きしたりしています。一方で、これも木村さんが言ったことと関わりますけれども、少し自治体のほうで歴史文化のようなものを考えていく要素も増えてきているようにも思います。文化財保護法の改正があって、これもいろいろ議論がありましたけど。一方で、地域総がかりで文化遺産を守っていく体制が必要だというふうに文化庁が言うようになってきたり。そういう全体的に大きな変化がありますので、うまく状況も活用しながら私たち自身も一つずつ組み立てていくということをもう一度していければと考えております。

次の10年というのはどうなるかと。市沢先生もさっき言われたように、最後の10年間のころには恐らくもういないんじゃないかなという感じもしていますけれども。その世代交代を大学としても進めていく時期に入ろうとしていますので。皆様の御協力ももらいながら、そういうことも大学としてもできるようにしていきたいと思っていますので、今後ともよろしくお願いいたします。以上です。

○司会（市沢） ありがとうございます。ちょうど時間になったと思いますので。全員、うまく御報告の内容を拾う議論がなかなかできなくて申し訳なかったのですけれども。これで最後というわけではもちろんありませんので、今日はこれで一応討論は終わりたいと思います。

頂いたいろいろな課題に関しては、今後これからまた改めてセンターで話していきたいと思えますし。お話にあったように、これまでのセンターの活動は何か大きな青写真があってそれに従ってやってきたというよりも、個人が個々の活動の中

で何とか課題を見つけて、その課題をみんなで共有して広げていくというふうにしてきたところもある。恐らく、世代交代も具体的な場で行われるというようなことが大きいんじゃないかなと思うのですが。そのときは、また関係の皆さん方と一緒に仕事をしながらそういうことを実際に進めていくということになるだろうと思いますので、今後ともよろしく願いいたします。

○大国 時間、過ぎていくんですけど。最後、一言いいですか。要するに、1995年の震災の後のいろいろな対応の中でいろいろな新しい取り組みをして、新しいものを我々としては神戸大学も含めてやってこられたと思います。

やはり手法と成果という問題があって。手法という部分で言うと、大槻先生が今日お話をされたように、地域住民が関わる、主体になるということで新しいものだと思うんですけど。問題は、そういう形をとる中でどういう歴史研究に対する新しい成果を生み出したのかということについては、今回テーマではなかったのほとんど議論されてきませんでした。これについては、やはりこの20年間で新しい手法とか、新しい考え方とか、新しい担い手が生まれたことによって今までなかった新しい研究が生まれているということをやはりもう一回精査していただいてアピールしてほしいなと思います。

今まで、プロの研究者の中の問題関心だけでは生まれなかった問題関心とか、テーマとか、そういうものができているじゃないかということは、ちゃんと全国に神戸から発信する必要があると思っています。もう一度連携センターの中でこの20年間でどんな新しい研究成果、新しい歴史研究の視覚、新しい資料の使い方が生まれているということについては一度総括をする。そういう場を内部で考えていただけたらなと思います。

もう一つは、今日も少し出ましたけれども横の連絡の話ですね。大槻先生がおっしゃったように、なかなかほかの団体との連絡が取りにくい。となると、何かツールが要る。ツールをうまく開発するというのもちょっとうまく考えていただけたら

いかなというふうに思います。

ネットワーク化して誰かが書き込みをしたら、それがみんなに掲示板のように伝わるとか。そこに加わることによって、ほかの団体が今度こんな活動をやるよ。あるいは、こんなイベントをやるよということがお互いに知れるような、何かそういう中核組織として連携センターが何かそういうツールを作っていて、そのツールにみんな参加したらほかの団体はこんなことをやっている、こんな成果が生まれた、あるいはこんな出版物ができた、買いませんかみたいなね。そういう情報共有のための、あるいは知識交流、そういうツールを何かちょっと構築していただけたらほかの団体も関わりやすいのかな。あるいは、情報を得やすいのかなと思うのですね。

これを一々全部大学側が集約してみんなに送るとなるとこれはなかなか大変なので。勝手にいろいろな団体が自分のところの情報を書き込むというか、入力するのは全部それぞれの団体ですよ。もし、何かトラブルがあったら相談や責任をとりますよ。でも、その場といいますか、そういうプラットフォームの用意をしておきますというような、そんなものがこの20年の蓄積の中でできなかなというふうにちょっと思っています。もし、そんなことが技術的に可能であればぜひ検討いただきたいなと思います。

2点です。よろしく願いします。

○司会(市沢) ありがとうございます。確かに、前者の、じゃあ一体研究のどこか変わったのかということはやはり検証すべきだと思いますし。意外に我々は手法は知らないのですが、そういう成果を本として出している大学が増えてきているというのが事実で。

例えば、私が知っているのは金沢大学とかでしょうかね。教室ぐるみで地域調べをやって、それで卒論を書いて、その成果をきちんと世に問うというようなことがあったりするので。手法によって、おっしゃったようにコンテンツがどう変わるのかというのは検証が可能だと思います。

後者については私が答えるべきで問題ではない

かと思えますけど。やはりその構築もできれば連携関係の中で最終的にどこかには置かなければいけないだろうと思うのですが。似たようなことを県博がやろうとして結局うまくいっていないままなのか、終わってしまっているようなところもあると思うので。少し勉強しながらまた協力関係の中で考えさせていただきたいというか、ぜひ一緒にやらせていただきたいと思います。

あと、チャットに増田さんから貴重な意見が出ています。

○司会（井上） 増田行雄さん（神戸史学会）からのチャットです。「今回の新型コロナウイルスで働き方が変わろうとしています。プライベートな活動、社会的活動が多くの人にとって労働と両立可能なものになり、その両立が当たり前になっていくという可能性と思います。こうした方々をどう取り込むか。地域歴史遺産の保存活用のポイントの一つだと思います。この考え方のベースは、ジャーナリスト外岡秀俊さんの記事です。」ということで、以下、記事を御紹介いただいております。御参照いただければと思います。

それでは、これをもちまして、今回の第20回歴史文化をめぐる地域連携協議会を終わらせていただきたいと思います。

最後になりますけれども、ポータルにアンケートを載せております。今回、協議会に当たって報告者の方を対象にアンケートをとらせていただいたのですが、そこでいろいろ貴重な意見を頂戴しました。今回の協議会自体についても、皆様から少しでもいろいろな御意見をいただければ今後の協議会につながっていくのではないかと考えております。今回の協議会への意見でも構いませんし、今後、こういうことをやってほしい等々、いろいろ御自由に書いていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、長い時間お疲れさまでした。

これをもちまして、第20回歴史文化をめぐる地域連携協議会を終了したいと思います。また、来年皆様とお会いできることを楽しみにしております。ありがとうございました。